砲魂決戦物語～俺と榴弾砲が満州で～

オザワ一号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砲魂決戦物語～俺と榴弾砲が満州で～

【Ｎコード】

Ｎ０８８２Ｈ

【作者名】

オザワ一号

【あらすじ】

物には魂が宿る。艦船に宿ればそれは艦魂と呼ばれ、飛行機に宿れば飛魂と呼ばれ、大砲に宿れば砲魂と呼ばれる。これは太平洋戦争最後の激戦地――満州『虎頭要塞』の砲魂の少女――ヨヒトと少年兵――沢口のドタバタ・シリアス戦記である。

プロローグ（前書き）

始めましての方、お久しぶりの方、どうもです、小澤です。テストも終わり、やっと自由の身になれました（泣）！！
前作の『砲魂決戦物語』を改定した小説です。
どれくらい改定されているかと言ったら零戦で言うと１１型から２１型に進化（してんのか？）した感じです。はい。

『艦隊決戦物語』の最終回も中途半端で『艦隊決戦物語５２型』も全然書かれていませんが（え？）どうか宜しくお願いいたします。

プロローグ

１９４５年２月

太平洋の島々からは『玉砕』が叫ばれ、島々に掲げられた日の丸は合衆国の星条旗に移り変わる。日本の都市のほとんどがＢ２９によって空襲された。連日、飛行機が飛行場をすべり、生きて帰って来れない出撃を繰り返す。

４年前に始まった『国のため』の戦争はその『国』を滅ぼす形で終焉に一歩、また一歩と音を立てながら終焉に向かっていた。

そのころ、黒海のクリミア半島に存在するヤルタは物々しい空気が漂っていた。

「欧州や太平洋の戦争はもうすぐ終わる。我々の勝ちでね」

そう饒舌に語りかける老人の口元が少し上がる。どうやら笑ったらしい。

「「……」」

私と軍服を着た老人は黙って彼の目を見据える。

「だが今すぐ戦争が終わるわけでもない。その間、今でも前線の兵士達が敵の銃火で倒れている。それは欧州もアジアも同じ……嘆かわしいことだ……」

老人は顔を床に向け、首を左右に振って悲しんでいるように語りかける。

「私はせつに世界の平和を願っている。だから枢軸国との戦争を早期に終結させるため、貴方に協力して頂きたい。勿論（もちろん）ただでとは言わない。それなりの見返り……例えば樺太や満州の一部の権益を認めようと思う、どうだろう？」

「……考えときましょう」

軍服の老人の返事を聞いてやっぱりアイツは――饒舌に語るアイツは正に狸だな、そう私は感じた。『何が平和を願っている』だ。

自国の軍需産業の発展、それに伴っての利益・権益の拡大……平和より金と権力を願っていると言った方がお似合いだ。

どうでもいいが、口元が寂しい。私はポケットの中から葉巻を取り出し、「失礼」と声をかけてからマッチをする。

かすかに音を立てて温もりがつく。それを葉巻に移し、腕を素早く振って消す。

温もりの移った葉巻から立ち上る煙、その煙と時間は比例してゆっくりと流れていく。それに従って話し合いも進む。

「ふ～内容はだいたい決まりましたし……そうだ！　世界の平和に向けたこの素晴らしい宣言を記念して、写真でも撮りましょう！」

老人の提案。断る理由を私は持っていない。私は写真を撮られることにした。饒舌の老人は部下に耳打ちして手はずを整えだす。

私達もその準備のためにソファーに順番に腰掛ける事にした。左から私――チャーチル・老人――ルーズベルト・軍服の老人――スターリンが並ぶ。

後に『ヤルタ会談』と呼ばれたこの話し合いはやはり、ソ連に日本へ戦争を仕掛けるルーズベルトの布石だった。この布石が日本の悲劇に繋がるなんて私を含めて誰も思わなかった。

第1話　出会い（前書き）

それでは本編スタートです。

第1話　出会い

１９４５年７月下旬『虎頭要塞（ことうようさい）』

満州のウスリー河の東側の対岸、黒雲を吐き出す汽車が駆ける３０ｋｍ遠方のシベリア鉄道を見渡せる高地に建造された東洋随一の重火力要塞『虎頭要塞』。

重火力要塞と言っても厳つい装甲に覆われた建築物がある訳ではなく、丘陵に作られた砲陣地を地下の連絡トンネルで結んでいる天然の要塞だ。

その様子は空から見れば、頭を東に向けて足を大の字にした虎を連想させる。

頭にあたる虎東山には着弾を観測する観測所、その南には２４糎榴弾砲が２門、３０糎榴弾砲２門の猛虎原陣地。

虎東山から北西――虎で言う左前足にあたる猛虎山とその北にある虎北山の間には１５糎加農砲６門。虎林山の北西方向の斜面に『虎頭要塞』の主砲、４１糎榴弾砲が頓挫している。他にも、野砲８門、山砲１７門、歩兵砲１６門、高射砲１８門、フランス製の『２４糎列車加農砲』が『虎頭要塞』から２０ｋｍほど西にある水克陣地に存在していた。

「湿度、温度共に良しっと」

その内、茎の長い植物に覆われた倉庫――『試製４１糎榴弾砲』の弾薬庫の１室から声が聞こえる。

「たくっ……竹垣中尉も人使いが荒いな……弾薬庫の点検の頻度落とせばいいのに……」

その倉庫の中には人影が２つ。どっちも少年の面影が残る青年だ、しかしバインダーを持って点検している少年の方が拳半分くらい背が高い。着ている軍服から大日本帝國の陸軍士官と分かる。その襟には彼らが砲兵である事を示す火薬の煙を現す黄色の襟章が飾られ

ている。
「……風間……お前本当に重砲兵学校を卒業したのか……？」
背の高い青年が少し呆れた口調で背の低い青年――風間雄大少尉に語りかける。
「教官の弱みを握っていたから楽々卒業したよ、沢口」
風間はさらりと反応に困る言葉を沢口博少尉に投げかける。投げかけられた方は、
「……なんだよ、その、お前とは一緒に戦争したくねぇって顔は！？」
「……別に……」
「ま、別に世界が終わるわけじゃないんだから」
「……」
２人は横須賀にある陸軍重砲兵学校の同期だが、砲兵学校では口を聞いたことは無く、満州に来てから仲良くなったのである。
「それより終わったらもう出ようぜ」
「……お前は砲兵より歩兵に向いてるよ……」
「おう！　ありがとな！！」
いや、褒めてはないぞ、と沢口は口では無く胸の中で呟き、暗い表情で扉を開ける。そこには己の存在を『これでもか！！』とばかしに主張する眩しい夏の太陽が大笑いしていた。
「ほら」
沢口が弾薬庫内で書いていた紙を風間に手渡そうとする。
「？　なんだよ？」
「俺が書いたんだからお前が大木大尉の所にもって行けよ」
「……じゃんけんぽん！！」
沢口の不意を付くように早口で喋った風間。沢口は『ぽん！！』に合わせて手のひらから生えた５本の指を全て伸ばし、俗に言う『パー』を作る。
それに対して風間が出したで手は全て、握られていた。
「おら、行って来い」

演技がかった硬直を暫(しばら)く行なった風間にさっき室温・湿度を記入した紙が挟んであるバインダーを差し出す。それに露骨に顔を歪める風間。だが沢口の手からバインダーをひったくる。
「お前は先に砲身磨いとけよ」
「お前こそ中尉のところ行ったら真っ直ぐ４１糎砲のとこ来いよ」
そう言うと自分達戦闘配置――『試製４１糎榴弾砲』の元に向かうため、風間と別れて１人歩き出す。足取りは重くなく、軽くなく、要するに普通だ。一般人が自分の仕事場に向かうように歩く。
沢口は話し相手もなく、少し自分達の戦闘配置の『試製４１糎榴弾砲』について思考を巡らす。
『試製４１糎榴弾砲』――それは大正１０年頃に計画された『要塞整備計画』に伴って製造された口径４１０ｍｍの巨大榴弾砲で、砲身重量のみで８０ｔ、全備重量が３１８ｔにも達する重砲の中の重砲だ。
日露戦争での旅順攻略戦で活躍した榴弾砲の口径が２８糎、それを鑑みれば絶大な破壊力を持つ強力な火砲を製造したことになる。だがそんな重砲は『試製』、つまり試作品として１門しか完成していたない。
それは『試製４１糎榴弾砲』が完成した頃に海軍で世界的な軍縮会議が起こった。結果は建造中の４１糎砲戦艦を破棄することと米英憎しの風潮が生まれたと言うこと。
問題はここでは終わらない。海軍では４１糎砲戦艦に搭載するはずだった４１糎砲が余ってしまったのだ。その簡単な解決策として海軍が陸軍に４１糎加農砲として余った４１糎砲移管したのだ。移管された４１糎加農砲は『対馬要塞』などに据え付けられ、当初の『要塞整備計画』の目的を完遂してしまっていた。
そのため４１糎榴弾砲の量産は見送られ、『試製』となって富津の射撃場の倉庫に１０年くらい収納されてしまった。
だが陸軍が対ソ戦を意識しだし、ウスリー河を挟んでソ連と対峙する『虎頭要塞』の火力向上と射程１万４８００ｍの『七年式３０

糎長榴弾砲』の射程外――１万５千ｍに迂回してしまったシベリア鉄道を砲撃するために射程２万ｍの『試製４１糎榴弾砲』を満州に運んだのだ。
「……風間のやつ……来るよな？」
逡巡する間に目的地が見えてきた。
「来いよな……」
前に一度、じゃんけんをして今回と同じく風間が『グー』で負けて中隊長の竹垣中尉の所に行って貰った時、風間は帰って来なかった。山に張り巡らされた凸凹な塹壕を歩き、偽装用の保護林を抜けたとき、戦闘配置でる外径３５ｍ、内径１７，６ｍの鉄筋コンクリートの半円がそこに在った。
鉄筋コンクリートのドームが覆うその中に虎頭の主砲『試製４１糎榴弾砲』が鎮座している。噂だがこのドーム、鉄筋が他の施設のものより少ないらしい。本当に嫌な噂だ。
ドームの中にはまだ他の兵たちは来ていない。１番乗りだ。
「さ～て、掃除始めるか……ん？」
人の気配を感じて振り返る。竹垣中尉の所に行っていた風間か、他の同僚か……。
「！？！？」「……」
違った。振り返った先には風間も同僚も居なかった。そこに居たのは１６・７歳くらいの腰まで届く長い髪をした少女が居た。よく見ると自分と同じ帝國陸軍の制服、襟には砲兵を表す黄色い襟章。腰には軍刀。そして国防色の上着と同色のプリーツスカートを履いている。
この少女は何だ！？　目の下にクマがあってすっごく眠そうだな……って違う！
なんで要塞の中に少女が居るんだ？
疑問が浮かびだす沢口。彼の頭は『お前は何者だ！！』と言葉を発しようとした。だがそれを口にする前に謎の少女が口を開く。
「……布団……」

少女が呟くと何も無い空間に突如、球状の光が湧き出て来た。その光は眩しくは無く、とても優しげな雰囲気がある。優しく丸い光は次第に厚みのある長方形に形を変えて行き、光が弾けるように消えようとすると柔らかそうな白い敷布団・ノリの利いたシーツ・軽い薄での毛布の巡で光の中から出てきた。それは順番を守って軽やかに着地すると簡易だがしっかりと寝床が完成していた。

「！？！？」

何ガ起コッタ？？

２３年間生きて体と共に成長し経験を積んだ脳が答え導き出そうと懸命に言葉を探し始める。探した。探したが、無い。該当する答えが無い。

「……」

少女は沢口が居ないかのように軍服の上着のボタンを外す少女。彼女の上着は畳まずに、投げる。頭に乗っていた軍帽、投げる。腰に吊った軍刀、さすがにコレは投げずに足元にそっと置く。

沢口は腕でも掴んで強引に何者かを聞き出すか、それとも着替えていることを注意すべきか１秒の半分くらい迷ったが、

「……え？　ちょ！　おまッ！！」

沢口が何かを口に出そうとしたとき、彼女のスカートが空挺作戦を実行し……。

「わあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

結局、純情な沢口は全ての作戦を投げ出し、『撤退』では無く『転進』することを決めた。そのため閉まりきった鉄扉を慌てて押し開けようと扉と短い戦闘を経て外に飛び出した。

「？　……なんだ？」

軍服を脱ぎ散らかしていた少女は突然の絶叫と扉と戦闘し、ドームから砲弾のように外に飛び出して行った士官服姿の青年の背中を一瞬見たが、眠さに負けてそれ以上の事をせずにワイシャツのボタンを倦怠感に満ちながら外し、布団と同じ光の中から浴衣のような

寝間着を出現させ、袖を通し、拳の半分が楽に入るくらいに緩めた帯を結ぶ。少女はシーツと毛布の中に足を滑らせ、目を瞑ったと思うと夢の世界に旅立ってしまった。

「あ～あ、なんかめんどくせぇな……だいたいなんで士官の俺たちが砲身磨きなんだよ……だいたい大木大尉は……」

軍法会議になっても仕方が無い言葉を呟きながら沢口の後を追うようにドームに近づいていく風間。本当に皇軍兵士なのか？　と問い詰められそうである。

「うあぁぁぁぁぁぁ！！」

「ん？　なんだ！？」

『試製４１糎榴弾砲』のドームを包み込んだ保護林から血相を変えて叫びながら重砲兵学校の動機で友人な少尉が全力で駆けて来る。なんか理由はよく分からないけど大声出して駆けて来る１８歳の人が居る。

ドウシヨカナ？　ココカラ逃ゲテ良イカナ？　ウン、良イヨ。力（ちから）ノ限リ走ルンダヨ。分カリマシタ、頑張リマス。

自問自答で答えを出した風間は重砲兵学校でも見せたこと無いくらいの見事な回れ右で沢口に背を向ける。

「何も俺は見てないし俺にはあんな同期は居ないな」

全てを忘れて明日への一歩を踏み……。

「待て！！」

出せなかった。

「俺を見たろ！　同期を忘れるな！　全力で逃げ出そうとするな！！」

「いやいやいや！！　大声出して走ってくる奴から逃げる権利が俺には在るね！！　うん、間違いない！！」

「大変なんだ！！」

「無視かよ！　おい！」

「『試製４１糎榴弾砲』のドーム内に女がいたんだ！！」
「……何処だって？」
「あそこだ！　あそこ！！」
鉄筋コンクリートに覆われたドームを指差す。
「……俺の故郷の知り合いに軍医が居るんだけど……」
「そんな目で俺を見るな！　確かに居たんだ！！」
頭が旅立ってしまった奴にはどう対処したら良いのかなぁと考える風間の顔を他所に沢口は、
「いいから来い！！」
強引に風間の腕を掴んで走ってきた道を歩き出す。
ドームまで３ｍほど。
「行くぞ！！」
「はいはい」
中に入るといつも通り。薄暗い中でもソ連軍へ鉄槌を下す『試製４１糎榴弾砲』が威圧感を送生み出している。
だが違う物があった。それはちょうど１６・７歳くらいの少女が膝を曲げて横に寝ているようなふくらみが在る薄い毛布。さっきの少女はその布団を頭から薄での毛布を被り、安眠を伝える寝息がそこに誰かが居るのを伝えていた。
「「……」」
沢口と風間が顔を見合わせる。沢口は左手で『さっき言った女が居るんだ』と布団を指す。風間も布団を右手で『マジで！？』と指指し返す。それに頷く沢口。
「……誰だ！？　あれ！？」
「さっき言った謎の女だ！」
小さく言ったつもりだったのだが意外鉄筋コンクリートの壁に反響して大きく聞こえ、沢口と風間は息を殺して毛布を注視する。一回、モゾリと動いただけだったので安堵のため息を沢口が付いた後、風間がしのび足で毛布に近づき始める。沢口もそれを追う。
２人が毛布の左側に到達し、沢口が少女の頭が在る方、風間が足

が在る方の端を握る。少女は2人に背を向けてまだ安眠を堪能している。
一度2人の視線が絡み合う。2人にはそれで十分だった。
「「せぇ～の！！」」
絶妙なタイミングで布団を2人が引き剥がそうとする。あの少女の頭、膝が見え……と思った瞬間、布団は信じられない力で引き戻される。
「ちょ！　んだこれ！！」
「風間踏ん張れ！！」
現役の、満23歳の砲兵が2人と謎の少女が布団の引っ張り合いをする。母さんはこんなに苦労して居たのだろうか？　と沢口は考えるが喋る余裕がない。一進一退の攻防戦。それは日露戦争の旅順攻略戦を彷彿させる激戦になった。
「お～いどうだ？　やって……お前ら何してるんだ？」
「た、竹垣中尉！！」
第2砲兵中隊の中隊長の突然の姿に攻防戦を放棄して敬礼をする。毛布は力余って少女の黒く長い髪が毛布からはみ出してしまっている。
「あれか？　パントマイムってやつか？」
「？　それより侵入者です！！」
沢口が報告する。それに頷く風間。
「？　侵入者？　どこに？」
頭が旅立ってしまった奴らにはどう対処したら良いのかなぁと考える竹垣中尉の顔を他所に風間は、
「ここですよ！　ここ！！」
毛布の塊を指差すが、
「？　……冗談言ってないでさっさと砲身磨け！！」
その後、大尉のありがたい拳骨を賜り、沢口と風間は謎の少女を背に砲身をせっせと磨く羽目になってしまった。

第1話　出会い（後書き）

謎の少女とは一体！？　って前に読んで下さった方なら分かりますよね。
次回の更新はなるべく早くしたいのですが、今のところ未定で……。
ズズーン！！

？？？「まったく、何をしているんだ。それではご意見ご感想待ってるぞ」

第2話　出会い2（前書き）

どうも、小澤です。
前回の謎の少女とは！？
それでは本編をどうぞ。

第2話　出会い2

この満州に来てからおよそ1週間。異国での生活にも大分馴れ、上官の命令を忠実に守り、御国に御奉公していることが自分でも実感できる余裕が生まれました。父さんに母さん、そして妹、兄は元気にしております。

元気なんですが……。

「おら！！　遊んでいた分しっかり磨き上げろ！　こおの榴弾砲が有事の際に動作不良を起こしたら遊んで整備をしていなかったお前らのせいだぞ！！」

元気なんですがとても理不尽な目に在っています。それでは最後に皆の健康をお祈り申し上げます。

沢口は竹垣中尉の暴風のような怒鳴り声を聞きながら心の手紙にペンを走らせていた。沢口は串刺しにされてしまいそうな中尉の眼力とそれに何の反応も示さず一心に安眠を享受する謎の少女が嫌味なくらい気持ち良さそうな寝息を背中に感じていた。

「沢口！！　ここは学校じゃないんだ！！　このは戦場なんだぞ！！　お前のせいで俺たちは殺されるのか！？　あ！？」

沢口は「スイマセンでした！！」と声を張り上げる。目のふちに溜まった水はしょっぱいからきっと汗なんだろう。そうであってくれ。

「……チキショウ、なんだってんだ……」

目から汗が滲む風間が無念を現すように呟いたのが耳に入った。

「まったくだ……てか、さっきの中尉は……冗談だよな？」

「あったりまえだろ？　きっとアレだ、グルなんだ……たぶん……」

「グルって……なんのだよ」

風間はもったいぶる様に押し黙る。グルってなんのだよ、まさか竹垣中尉の愛人とか？　いや、さすがにそれは無いか、と自分の考案した竹垣中尉愛人説を思いついた時、声を低くして密談をする演

技のように、
「……露助の間諜だよ」
竹垣中尉間諜説を発表した。
「ソ連の？　まさか……」
だが最近、監視哨からソ連兵が頻繁に対岸を偵察に来ていると通信科の相沢と言う奴に聞いたことがあった。
「おそらく中尉とあの女は『虎頭要塞』の秘密を探りに来たんだ。ここは国境沿いの要塞の中で唯一シベリア鉄道が見えるからな、ソ連と開戦になればソ連軍はきっとシベリア鉄道を使って物資の輸送をする。そうなりゃココに間諜が現れても不思議じゃね」
その言葉には竹垣中尉間諜説を納得させる部分がある、だが、
「おい待てよ、２人とも日本人だったぞ、それに女を間諜（すぱい）にすることなんてないだろ？」
そうだ、ソ連には女性の狙撃手が居てドイツ軍将校を沢山殺したって噂があるが、敵地に、それも男しかい無い『虎頭要塞』に女間諜を送るなんて、まぁ要塞の『試製４１糎榴弾砲』のある猛虎山と最西端の虎嘯山の虎嘯山よりの間にある虎西山の陸軍病院には看護婦が居ると言うし、女間諜なら『試製４１糎榴弾砲』が鎮座するココでは無く陸軍病院の方にに行くんじゃないのだろうか？
「日本人に似てる奴をよこしんただろ？　それに露助のやることだからな、アイツ等は何を仕出かすか分からん。噂だと『雪が積もっているから落下傘無しで空挺作戦やっても平気だ！』　って空挺作戦やったら部隊が全滅したって聞く。そんな連中だぞ？　だから別に不自然じゃねぇよ」
「でもいくらなんでも……」
「い～や、間違いない。竹垣中尉とあの女はソ連の間諜にきま……」
「随分楽しそうな会話だな、風間……」
ゴゴゴ……と音が聞こえそうな竹垣中尉の眩しい笑顔。もう目を合わせられない。
「あははは……どうされました中尉殿……？」

明らかに顔が引きつっている風間。
「ふふふ、愉快な事を考える頭だな」
「ま、まじっすか……なんと光栄な……」
風間、きっと褒めてないって、と沢口は心に念じるが風間にはそれを受信する能力が残念ながら備わっていなかった。
沢口の頭が回転しだす。竹垣中尉の両手が風間のしっかり両肩を掴む。風間は肩を動かしてそれが外れないものか試みていたが、無理だろう。
「いい加減にしろおおぉぉぉぉぉぉ！！」
竹垣中尉は頭を一瞬反らしたかと思ったら高速で頭突き（ヘッドバット）を風間の前頭部に決めた。決められた何も言わずに風間はその場に崩れ落ちる。
「まったく、訳の分からんことを……沢口！！」
「ハイッ！！」
殺ラレル。
頭に遺言を書こうとした沢口だったが、
「俺たちが死なないためにしっかりやっとけ」
「ハイッ！！」
力尽きた同期を背中に竹垣中尉はまだ怒りが収まりきっていない足取りで扉を乱暴に開け、乱暴に閉じてしまった。
「……もしもし？　風間君？　生きて……」
一定の痛さを超えると人は痛みを感じないと言うが、大丈夫なんだろうかと倒れた友人の顔を覗き込もうとする沢口。
「くそー！！　あんなろー！！」
組み体操のような絶妙としか言いようが無いタイミングで勢い良く起き上がる風間。ちょうど2人の額が接触事故を引き起こし、数分のた打ち回っていた。
「チキショウ！！　アレもコレもソレもッ！！　全部アイツのせいだ！！」
「ソレってなんだよ……」

沢口の言葉を無視して風間はまだ気持ちよく寝ている少女に今度は足音を忍ばせる事無く無粋に歩み寄り、
「起きろゴラアアァアァア！！」「う～ん……うるさい……」
渾身の力で布団を剥ぎ取る風間、ソレと同時にさっきまで夢の世界に行っていた少女が帰ってきた。
風間は前回の布団攻防戦（？）の経験に則って全力で布団を剥いだ。だが今回はなんの抵抗もないままであったので勢いが余ってしまい地面とキスをするはめになってしまった。
沢口が見た彼女の姿は浴衣のような白い寝間着とソレと反転する黒く、流れるような長髪の少女が上半身を起こした所だった。
「ぐヴぇら！！」「もう少しで『メッサーシュミットＢｆ１０９』を撃墜できたのに……」
人間にそんな発音が出来るのかと言う声を出して倒れたままの風間。どんな夢を見ていたのか凄く気になる少女がまだ眠たそうな目を右手で擦っている。その瞳は寝起きだからか三日月のように鋭い。
「か、風間！」
「……モウ嫌ダ……」
倒れた風間を助けるべきか、それとも謎の少女に尋問するか、どっちから始めようか？　とりあえず少女は逃げそうに無かったので風間を助けようと手を伸ばしたが、
「て、テメェー！！　誰なんだ！」
伸ばしたが風間はソレを無視して叫びながら立ち上がる。
「……」
少女はしばらく目を擦った後、首を左右に振って回りに誰か居るのか確かめる素振りをする。
「お前だ！　お前！！　憲兵隊にしょっ引くぞ！！」
「……私？」
また少し悩んだ後、風間に指を指された少女は怒っているのか、それとも目つきが悪いだけなのか、沢口と風間を睨むように視線を送る。

「そうだお前だ！！　誰なんだ！！　さっさと言え！！　憲兵呼ぶぞゴラアアァァア！！」
もう逆切れ状態の風間。もう手が付けられない。
「私は『試製４１糎榴弾砲』だ」
「「「……」」」
とても。意味ありそうな沈黙。
「なんだその『頭が逝ってしまった奴にはどう対処したら良いのかなぁ』と言う顔は」
なんか今日はこの言葉をよく聞く気がする。
「……風間、お前の友人……軍医なんだって？　どこに居るんだ？」
「確かハルピンの防疫給水本部に居るよ、こんど手紙を書いてみるか」
「……お前ら私を起こしておいて……なんだその言いぐさ……」
少女が目を細めて布団に投げ出していた足を胡坐に組みなおす。
「そうだな、ソレが良い」
「一先ず陸軍病院に送ってやろう」
「あぁ」

「「「……」」」
沈黙があった。それはとても短いようでとても長かった。
そして擬音してはいけない様な生物を叩く音が何処までも蒼く、何処までも高い空に、吸い込まれて行ってしまった。

「「スイマセンでした、お許しください、私が間違っておりました」」
頭に大きな瘤を5発作った沢口と6発作った風間は自称『試製４１糎榴弾砲』様の前にキレイな正座をして座っている。『試製４１糎榴弾砲』様は白い寝間着のまま沢口と風間の前に仁王立ちして日本刀のような目つきで2人を見下ろす。どこかから入ってくる薄い風が彼女の腰まである黒髪を少し揺らしていた。

「まぁ、分かれば宜しい。それにしても留守にしていた1週間の間に『見える』奴が2人も配属されるとはな」
頭がそれを理解するまで少し時間が掛かる。
「あの……見えるって？」
沢口が不安げに右手を上げて尋ねる。頭を横切るのはさっきの竹垣中尉の姿。
「フン、それでも俺は信じねーぞ！　なぁさわ……あ、ゴメンナサイ、本当に許して下さい！！」
あくまで間諜説を信じようとするが目の前の少女が殺気の篭った眼差しで風間を見つめると風間は士気を低くし、間諜説を撤回する。
「それじゃ……幽霊、ですか？」
やっと該当する答えが出た気がした。
「似て非なるもの、だ」
風間を見つめた眼差しで沢口を見つめる少女。幽霊が機に食わなかったのだろうか。
「元来、物には魂が宿る。それが艦だったら艦魂と呼ばれ、飛行機だったら飛魂と呼ばれる。大砲に宿った魂は総称して『砲魂』と呼ばれる」
沢口はそんな怪談を聞いたことがあった。それに『船にはな、魂が宿るんだ。だからしっかり整備してやるんだ』と千葉県の九十九里で漁師を営む父さんが前にそんな事を言っては自分を甲板掃除に付き合わせたり、一緒に船内にある祠に手を合わせたこともあった。
「じゃ、お前は『試製４１糎榴弾砲』だって言う……スイマセン、言葉遣いには気をつけます！！」
「……そうだ。アレは『試製４１糎榴弾砲』の体だ。私はその砲魂ってやつだ沢口少尉、風間少尉」
「なんで俺の名前を？」
早川の質問。
「ここ1週間、『根こそぎ動員』やらで急に将兵が増えてきたのでその書類整理を仲間とやって来たからな。眠くて仕方だ無いときも

だ。だから憎さのあまりに士官の顔と名前は大体覚えてしまった」
「「……」」
冷や汗が頬を伝わる沢口と風間。
「???」
この少女にはこの沈黙の意味が分からないらしい。
「……じゃ、君の名前は？」
「名前？」
「って！　待て沢口！本気で信じるのか！？」
形相を変えて風間が喋った言葉がドームに反響する。
「お前こそ待て！！」
「なにを……」
「なにをだよ」と言い切る前に風間に7つ目の瘤が生まれた。
「で、質問はなんだった？」
「君の名前だよ」
あぁそうかと少女が呟くと、さっきまで睨むような瞳は変わらないが目の置くには怒りと言うものが無いことに沢口は気付いた。
「私の本名は『試製４１糎榴弾砲』。皆からは、ヨヒトと呼ばれている」

これが俺と、
「皆？　って事はお前みたいな反則ビックリ幽霊がまが居……ゴメンナサイ」
これが私の、
「まぁ宜しくな、ヨヒト」
『出会い』であった。

第2話　出会い2（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、ありがとうございます」

ヨヒト「やっと出れたな、それにしても前作とは大幅に展開が違うな、風間が砲魂を見れたりとか……」

作者「えぇ、『虎頭要塞』のことが詳しく書かれているサイトを見つけたので、思い切って設定を大きく変えることにしました」

ヨヒト「なるほど、それと『艦隊決戦物語52型』はどうなっている？」

作者「……」

ヨヒト「どうした？」

作者「言いにくいのですが……」

ヨヒト「なら言うな（キッパリ）」

作者「……」

→何かを訴えるかのような目でヨヒト見る作者。

ヨヒト「なんだ……？」

作者「いや、目は口程に物を言うって……」

ヨヒト「読者が見れないではないか、さっさと書け」

作者「（大和達とは違う苦痛が……）アイディアが、こちらの方しか最近思いつかなく……」
ズガアアアアアアン！！
→４６ｃｍ砲弾の着弾音。

ヨヒト「まぁ、そっちを楽しみにしていた奴、本当にスマンな、作者はヘタレだから適当に待ってやってくれ、それでは意見と感想を待っている」

第3話　砲魂（前書き）

え～、早川と風間の年齢を２３歳に引き上げる事にしました。スイマセン。

第3話　砲魂

大砲は人類の英知の結晶だ。
良質な鉄を精錬できる技術があれば砲身を厚くしなくても強度が保て、軽量化でき
る。即ち多々の戦場へ持ち運びが出来る。

「赤い太陽に～流れる汗を～～♪　拭～いてにっこり～大砲手入れ～～♪　……」
「待て、ヨヒトそれって……」

良質な火薬を精製できれば火薬の感度を利用して効率の良い爆発を起こせる。即ち遠距離の敵兵をたくさん殺すことが出来る。

「太平～洋の～波波～波に～～♪　……」
「それって海軍の……」

科学の進歩と共に大砲は歩んできた。それは遥か未来へ行ってもそれは同じ。それらのたどり着く先は、無い。
でも大砲たちは何処に行くのだろう。人間が起こした戦争につき合わされ、それで壊れるして逝く。それを彼女たちはどう思っているのだろうか。

「海～の男だ、艦隊勤務、月月火水木金金～～♪」
「……」
何故か『月月火水木金金』を歌っているヨヒト。その目は相変わらず何かを睨んでいるようだが、声は機嫌が良さそうな気がした。
その声は林と背の低い草で偽装された鉄筋コンクリートの中に小さく反響する。

「なんでソレ歌ってんだ？　」
「私を運んだ輸送船の船魂と一緒に歌って飲んだのを思い出したから」
何があってソレを思い出した？　沢口がソレを口に出そうとしたとき、
「度～胸ひとつに～火のような練磨～～♪」
またもヨヒトは気持ち良さそうに歌を紡ぎだしてしまった。……まぁ、上手いからいいけど……、とその折れてしまいそうな旋律を聞きながら砲身を雑巾で磨き上げる。どうでもいいが中隊長の竹垣進中尉に報告書を提出しに行った風間が戻ってこない。
「旗は鳴る鳴る～ラッパは響く～～♪　行くぞ～日の丸～～♪　……？」
その時、薄暗いコンクリート内に光が急に現れる。それは大きくなり、次第に人の形へと変わっていく。
「やっほ～ヨヒト～ご機嫌だね～」
その人はヨヒトより2歳くらい年上の少女だった。ただ、普通の少女と違って帝國陸軍の士官服、襟章は黄色――つまり砲兵。だがソレよりも目を見張るのは、透き通るような白い肌と金髪碧眼のその容貌。どこからどう見ても日本人ではない。
「あれ～ヨヒトの砲兵さん？　1人でよくやってるね～関心、関心～」
「ど、どうも……」
「「……」」
しばしの沈黙。
「ねぇねぇ、ヨヒト～この人、独り言をナイスなタイミングで言ったよ～」
「独り言じゃないから」
「なんか私達が見えてるみたいだね～」
「いや、実際見えて……」
「こんな人初めてだね～」

もうここまで来ると悪意を感じる。
「おいヨヒト……」
「海～の男の艦隊勤務♪」
「歌ってないで説明してくれよ！」
「……月月火水♪」
「説明しろー！！」

「ふ～ん、沢口君ね～、私は『九〇式２４糎列車加農砲』の砲魂、カノンだよ～」
「……やっと話が通じた……」
「ちなみに彼女はフランスのシュナイダー社製だから外見がアレなんだ」
ヨヒトが言ったように『九〇式２４糎列車加農砲』は陸軍がシュナイダー社に発注し代物だ。その射程はおよそ５万ｍを誇り、虎頭要塞より２０ｋｍ程度後方の『水克陣地』の近くのトンネルに格納されている。
「アレってなんなのよ～ヨヒト～」
カノンと名乗る砲魂。
「？　そう言えば君も砲魂？」
「そうだよ～、歩兵砲や対戦車砲に迫撃砲は歩兵科の管轄だけど名前は同じ砲魂、ただ襟章が赤色なんだよ～」
「ふーん、前から気になってたんだけど、砲魂って一つの大砲に一つの魂なのか？」
「別に全部の砲が人格を持っている訳ではない」
ヨヒトが沢口とカノンの会話を打ち切るように言う。
「ほとんどの砲魂は簡単に言えば眠っているようなものだ、それから目覚めた奴が私やカノンたちだ」
「それじゃこの要塞の他の砲も目覚めている奴が居るのか？」
それにヨヒトは一度、顔を縦に振って応える。彼女の長い髪が一度、揺れる。

「そう言えばどうして来たんだ？」
ヨヒトがカノンに疑問を提示する。
「そうそう、最近、シベリア鉄道が活発に動いているのよね」
「……そうか……」
ヨヒトの目がいつに無く鋭くなる。シベリア鉄道が活発に動いている、ってことはソ連が何かをしようとしているのか？
「私としては観光では無いと思うよ～」
う～ん、と声を漏らすヨヒト。緊張した空気が満ちようとしていた。
「お～い！　遅くなった、もう仕事終わったか……って沢口！　テメェーは何女の子に囲まれてウハウハしてんだ！！」
「そうか、沢口はウハウハしていたのか」「この人私達が見えてるような事言ってるよ～沢口君、軍医さんに見てもらうよう言って～」
「……お前ら他に言うことがあるだろ？」
「沢口！！　俺が仕事してる中お前はー！！」
「それは俺が言いたい、お前報告にどれだけ時間使ってんだ！」
「……金髪ちゃんは誰だ！？」
「なんだよさっきの沈黙！！」
「ヨヒト～凄いよ～私の髪の色言い当てたよ～運がいいね～」
「だからコイツも見えんだよ！」
「凄いと思わない～ヨヒト～」
「無視かよ！！」
「どん～と、ぶつか～る♪」
「歌ってんなよ！　何とかカノンを説得してくれ！」
「沢口！　なんで初めて会った女の子にそんなに親しげに話し……ハッお前もしかして前から……そうか俺に隠れて……」
「黙れこのヤロー！」
騒がしく、楽しげな声、その声には人間や自分たちの存在を恨んでいる様子は、無い。

第3話　砲魂（後書き）

小澤「ここまで読んで下さり、本当にありがとうございます」

ヨヒト「新キャラの……」

カノン「カノンだよみんな～」

小澤「これで前作のキャラは揃いました」

ヨヒト「今日は更新が遅かったな」

小澤「大学のオープンキャンパス行っていたので……眠いです……」

カノン「それじゃ、私が寝せて上げる～」

小澤「は？」

ズズーン！！

ヨヒト「それでは感想・意見待ってるぞ」

第４話　喧嘩（前書き）

極上艦魂会では最低、月１回は更新するように、と成っています。
『艦隊決戦物語』より『砲魂決戦物語』のほうについつい力が入ってしまう小澤です（力入ってるのか？　と言う疑問は受け付けられません）。
それでは本編をどうぞ。

第４話　喧嘩

８月５日

「装填よーし！！」
「閉鎖よーし！！」
夏の空の下に響く声。
「よーい、良し！！」
日本刀のように研ぎ澄まされた声。
「撃ち方始め！！」
竹垣中尉の声を聞いた沢口はなんのためらいも無く砲弾を放つために紐を力強く引く。
……。
だが、『試製４１糎榴弾砲』からは何も発射されない。
それもそのはず、本当に発射していたらソ連にこの『試製４１糎榴弾砲』の存在が気づかれてしまう。
それに何より関東軍司令部からの『静謐確保（せいひつかくほ）』、つまりソ連をあまり刺激するな、と命令されている。だから砲弾を発射したつもりで動く。
「装填よーし！！」
風間が大声を上げて弾が装填されたことになっている事を報告する。本来なら装填盤から砲弾が薬室に押し込められ、その後に装薬の入った布袋（薬莢では無い）を装填、と言った段取りが執り行われる。
「閉鎖よーし！！」
風間の声を受け、螺子状の閉鎖機が回転させて砲尾を密閉する兵士。
「第２射、よーい！　テェー！！」
その光景を壁に寄りかかったヨヒトとカノンが静かに見ている。

「錬度も向上して来たわね～」
「まだまだ、だ」
カノンの声を否定したヨヒト、だがその口元は嬉しそうに少し染まっていた。

「各員、小休止！」
竹垣中尉の声にその場で休憩を取る兵士たち。外の空気がドームの中の空気を暖める。
「お疲れ様～」
「あ～疲れた、疲れた……」
「風間、お前はほとんど何もしてないだろ？」
頬に伝わる汗を手ぬぐいでふき取る沢口、手にした手ぬぐいは休む事無く沢口の団扇として働き続ける。
「なんて暑さだ……」
「皇軍兵士が暑い暑いとは情けないぞ」
冷たく返すヨヒト。
「まぁまぁ、ヨヒト。頑張って訓練してるんだから大目に見ないと～」
温かく返すカノン。
「そうだ！　金髪ちゃんの言うとおりだ！」
「だからお前は声を張り上げてるだけだろ？」
気温より早く弾ける会話。それに沢口の手も動きを緩める。
「そう言えば沢口君は何処の出身～？　北国かな～？」
カノンは暑さに参っている沢口をホッカイドウ辺りの出身かな？と思考をトレースしていた。
「いや、俺は千葉県だよ、九十九里って浜の近くに住んでいるんだ、それで親は漁師をしてんだよ」
沢口の顔に懐かしさがにじみ出る。
「チバね～私も思い入れがあるな～あそこのフッツって射撃場でヨヒトと出会ったんだよね～」

「お互い『東京湾要塞』の一角をなすはずだったがな」
本来、要塞強化のために作られた『試製４１糎榴弾砲』と『九〇式２４糎加農列車砲』は帝都『東京』を守備する最後の砦、『東京湾要塞』のために作られた物だ。
余談だが、『九〇式２４糎加農列車砲』はシュナイダー社から買ったとき、台車などは買わず、砲単体を購入、要塞砲として運用するはずだった。
「数奇だな……」
珍しく真剣な事を呟いた風間。
「お前は真面目な事を言うとは……ソ連が侵攻して来るな」
ボソと呟くヨヒト、だがその言葉は実際現実の物となる。
「それじゃ、海軍とかに憧れなかったの～？　家が漁師なら～」
「……」
何気ないカノンの言葉に沢口の汗は急に流れるのを止める。
「くっくく、コイツ、本当は海軍の兵学校へ行って戦艦の主砲撃ちたかったんだと」
愉快げに語りだす風間。
「でもその試験に落っこちて陸軍の砲兵目指したんだとさ」
「……あと少しだったんだ……あと……」
「まぁ、アレでしょ～？　『ヨヒト』なら戦艦の主砲のようだし～ね～？」
ニヤニヤと語る風間、どうしようもなく負のオーラを垂れ流す沢口、苦笑いを浮かべるカノン。
「……」
これは楽しい光景なのだろう。だがヨヒトはなんとなく楽しく無かった。
沢口が自分と喋っている時より、カノンと話しているほうが楽しそうだ。
「……それで内地は空襲が激しいし、九十九里に米軍が来るんじゃないか！？　って騒がれてるから満州に来たらって言っても『故郷

は捨てられない』ってさ」
「そりゃ、故郷は捨てきれないわよ～」
「それに家には2つ下の妹ちゃんが居るんだって、よく可愛らしい手紙が届いてるし……」
「お、おい！　まさか見たのか！？」
「まさか！　見てないよ……お兄ちゃん♪」
「まぁ～！」
「○×△※□！！」
『お兄ちゃん』と呼ばれたことに声に成らない叫びを上げて応戦する沢口。
「……」
やっぱり気に食わない。理由は分からないが、なんだか面白くない。
カノンとは富津の射撃場からの友人で、恐らく親友と呼べる。沢口は『私』に配属された少尉で、砲魂（わたしたち）が見えて……つまり友人だ。
なぜ、友人と友人が話しているだけなのに、面白く無い？
「？　おいヨヒト？　どうした？」
気付くと沢口が自分の顔を覗き込んでいた。
「あ？　え、何でも無い」
慌てて言葉を見繕うヨヒト。
「そうだ、明日は非番だったな、虎頭の町に行かないか？」
「は？　まぁいいけど」
「よし、遅れを取るな沢口」
「ハイハイ、あ、カノンも来るか？」
なぜカノンに話を振る？
「いいわよ～ヨヒト～いいでしょ～」
「う、うむ」
「おいおい！　俺も明日は休みなんだけど、どうしよっかなぁ♪」
「ゲッペイってお菓子が美味しいのよ～」
「へ～それなら是非食いたいな」

なぜ楽しそうなんだ？　なぜ私は不愉快なんだ？
「無視かよ！！　俺も行くぞ！！」
「ハイハイそれじゃみんなで……」

「駄目だ！！！」

「「「……」」」
ヨヒトの声に固まる3人。ふーふーと荒い息遣いのヨヒト。
「みんなで行くのは駄目だ！！」
「……べ、別にいいだろ？　」
「駄目だ」
「みんなで行く方が楽しい……」
「駄目だ」
「でも……」
「駄目だ」
「「……」」
いつも以上に目つきの悪いヨヒト。
「じゃなんで駄目なんだ？」
ヨヒトの態度に沢口の態度もそれに応えるようになる。
「それは……」
言葉に詰まるヨヒト。ヨヒト自身も何故こんなに怒っているのか分からない。必然として答えも無い。
「なんも無いのに駄目とか言うなよ、そんなに我がままだと男も出来ないぞ、ただでさえ目つき悪いんだから」
「！！」
沢口としては何気なく言った言葉だが、それはヨヒトにとって言っては成らないことだった。
「好きで目つきが悪くなったんじゃない！！　それに言わせておけば……」
「言わせておけばなんだ！！」

「「……ッ！！」」
睨みあい動かない2人。
「もういい」
ヨヒトが一言、そしてヨヒトの体は光に包まれる。その光がヨヒトを覆い隠し、弾ける。そこにヨヒトの姿は無かった。
「ヨヒト……」
しまったと反省の色が顔に浮かぶカノン。
「なんだよ、アイツ……」
なんで怒ったんだ？　と疑問が浮かぶ沢口。
「小休止、止め！！」
竹垣中尉の声に体を動かし始める兵士達。
「おい、沢口、風間」
「「ハ！」」
竹垣に呼ばれた2人はカノンの元から小走りで竹垣の元に集まる。
「お前ら、なに大声出してんだ？」
沢口は色んな気まずさが残った空気によってまた、汗を書き出していた。

その日の夜。ヨヒトは月光が降り注ぐ虎東山にある観測所の中、測距儀などが鎮座するこの空間にヨヒトは居た。その手には飽炊所から拝借した酒を1人で飲んでいた。
「ヨ～ヒト～」
「……カノン、すまんが……」
「月がキレイね～」
静かな月が見下ろす満州は固定されたかのように神秘的な空気を漂わせていた。
「……あぁ、キレイだ」
そう言うと諦めたように手に光を集め、御猪口（おちょこ）を出現させ、カノンに渡す。

「……あまりに楽しかったから、ヨヒトの事を……」
心配するカノンに一言、
「気にするな」
そう言ってヨヒトは自分の御猪口を傾ける。
カノンは知っていた。ヨヒトが寂しかった事を。

富津の射撃場でヨヒトは試射が行われたものの、軍縮会議で余ってしまった４１糎砲に要塞強化の任を取られてしまい、倉庫に１０年近くも放置されていた。
試射として富津を訪れたカノン、そこで出会ったヨヒト、彼女はズット１人だった。だから友達付き合いとかも苦手だった。
それが尾を引いてかこの要塞に配属されても浮いていた。

そこに出来た新しい存在、それが沢口だった。

「ゴメン……」
「……」
そこにはただ、酒を注ぐ音しか響いて居なかった。

その頃、『虎頭要塞』より南へおよそ４０ｋｍ。そこのスンガチャ河の対岸――ソ連領、そこには１００人程度の人たちが居た。別に遠足とかツアーではない。
彼らの手にはそれぞれ小銃が握られている。
「……さぁ、行くぞ！！」
その内、隊長格の人物がそう叫ぶと同時に小銃のボルトが操作され、彼らは掛け声と共に小銃を発射、満州に流れ込んでいった。

第４話　喧嘩（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、誠にありがとうございました」

ヨヒト「……」
→ご立腹なヨヒト。

大和「……」
→『艦隊決戦物語』のヒロインの大和（ご立腹）。

作者「……どうしました？　そんな怖い顔して……」

大和「どうしたも、こうしたも有りません！！　なんで『艦隊決戦物語』の２期はまだ書かないんですか！！　山城さんに作者のＰＣをいじってもらったらプロットの完成してないじゃないですか！！」

作者「それは……その……とりあえず、その怖い顔辞めません？」

ヨヒト「誰の目つきが悪いんだって？」

作者「そんなこと言って……」
ズズーン！！

ヨヒト「問答無用」

大和「それではご意見・ご感想をお待ちしております」

第5話　戦争（前書き）

え～まず読者の皆様に謝罪することが２つあります。
１つは私の処女作『艦隊決戦物語』の続編『艦隊決戦物語５２型』ですが、この『砲魂決戦物語』を完結させてから執筆することにします。
何故ならこの小説１つで手一杯だからです。書く余裕がありません。待ってくれている皆様（居ないと思いますが）、本当に申し訳ありません。

２つ目ですが来週、私の高校の文化祭があり、執筆が出来ない可能性があります。どうかお許し下さい。
それでは本編をどうぞ。

第5話　戦争

8月6日深夜

虎頭要塞から南へおよそ４０ｋｍの地――于匣屯（うことん）、スンガチャ河対岸。

「……同志諸君、南進は大ロシア帝国から受け継ぐ悲願である」

ソ連領のそこには１００人ほどの小銃を担いだ歩兵が終結していた。

「我らが同志、スターリンもこの考えを持っている！」

彼らの対岸には日本軍の監視哨の建物が黒いシルエットとして存在している。

「その一歩を同志諸君と共に踏み出せることを、私は幸せに思う。さぁ、行くぞ！！」

その掛け声と共にライフルのボルトを操作する鉄の軋みに緊張の混じった音が辺りに鳴り響き渡る。

『―ＡＡＡＡＡ　Ａｘ　Ｗｏｗ（わあぁぁぁぁぁぁ）！！』『タン！！　タン！！　タタ　ーン！！』

「何事だ！？」

「ハ！　およそ2個中隊ほどの露助がスンガチャ河を発砲しながら渡河！　こちらに向かってきます！！」

簡潔なやりとり、外にはザブンザブンと重い水を蹴り飛ばし、闇を突き抜ける鋭利な光と音を発しながら露助が向かってくる。

「発砲許可を！！」

監視哨に居る兵達は慌てて自分の小銃に弾丸を装填し、ボルトを操作していた。気の早い者は窓から三八式歩兵銃のバレルを覗かせ、

発砲許可を出さない自分を恨めそうな目で撃たせてくれと訴えている。
「……発砲は、許可できん！！」
何故発砲しないのか？　それはこの頃、関東軍の基本方針として『静謐確保』――つまり『事を荒げず穏便に』と指示が各部隊に伝達されていたのだ。
「しかし……！！」
その途端、空気を切り裂く硬質で鋭い音が近くを駆け、地面の乾いた土が舞い上がる。敵の小銃の着弾。
「これはどう考えても宣戦布告です！！　やりましょう！！」
血の気の多い兵が戦争をしようと言う。
「いや、発砲は許可できない！！　各員は射撃準備を整え待機！なお、絶対発砲するな！！　これは関東軍司令部の命令、即ち天皇陛下のご命令でもあられる！！　分かったか！！」
その声に渋々と言った顔で応じる部下たち、突撃して来るソ連兵。部下の顔は渋かった顔から徐々に『死』への恐怖が張り付き、恐怖に歪みだす。
反撃出来ないという時間、非常に重く、行き詰る時間。その間にもソ連兵は監視哨へ接近する、その距離およそ５００ｍ。兵士の顔に一筋の緊張と恐怖が入り混じった汗が頬のラインに沿って流れる。
「もう我慢なりません！！　撃ちましょう！！」
１人の兵が銃を構えようとする。
「バカ者！！　勝手に戦争をするな！！」
それに上官が兵の鉄帽を叩いて静止させる。途端、日本刀のように研ぎ澄まされた音が駆け抜けて壁に当たる。その『トカレフＭ１９４０年半自動小銃』の７，６２ｍｍ弾は壁にぶつかると一瞬の星を作り出す。それに頭を屈め、身を硬くする。
「……ッ！！　いいか！！　絶対撃ち返すな！！」
上官の命令通り、関東軍の基本方針通りに行動したお陰か、この

ソ連兵は夜明と共にソ連領へ帰っていった。
　実はこのソ連兵部隊は制式な命令で動いていた訳ではなく、対日戦に備えて満州国境に配備された各部隊への命令の徹底が成されておらず、また、命令書の誤読から誤って領土侵犯を起こしてしまったのである。
この時から関東軍はアレス（ギリシャ神話に登場する軍神）に見放されてしまった。
　だがソレを知るものはここに、居なかった。

「う～ん……いい天気だ」
　沢口が吸い込まれそうなほど青い空に向かって大きく伸びをする。
「運が良いな、これも俺の日ごろの行いが……」
「良いのか？」
「たぶん！！」
　自信を持って言うな、心の中で風間に突っ込む沢口。彼の顔が苦笑いに染まる。
「そういや聞いたか？　昨日、于匣屯に露助が攻めてきた……らしぞ？」
「なんで語尾が疑問なんだよ」
　だがその情報に興味を抱く沢口。
「未確認の情報なんだよ、于匣屯の監視哨からそう通信が在ったらしい」
「誰から聞いたんだ？」
「通信科の相沢（あいざわ）」
　それは本当なのだろうか？　まぁ、別にそういう領土侵犯はこれが始めてではない。今回も『嫌がらせ』では無いだろうか？　沢口は胸を競りあがってくる不安を飲み下すように自分に言い聞かせる。
「それよか街に行こうぜ？」
「おう」

不安はある。しかしソ連と結んだ『日ソ中立条約』がある。ソ連政府はこの条約の延長はしないと通告してきた。だがそれでも条約の効力は来年――１９４６年の４月まで有効だ。だからソ連と戦争になる時期は早くて４月頃だろう、それを思い出し、沢口は完全に意識をずらす。

「……あ……」

「？　どうした？」

意識をずらしたのは良いが、あの後ヨヒトと喧嘩別れをしたままだった事を思い出し、別の不安が沢口を支配した。

「「……」」

案の定と言うべきか、とある砲兵少尉ととある砲魂少女がお互いの意地（プライド）で気まずい空気をせっせと製造していた。ご苦労なことである。

「……ヨ～ヒト～寝てたのをたたき起こして仕事を持ってきたのは謝るけどさ～」

金髪を満州の暑くなりかけた風が揺らしながらカノンが苦笑いでヨヒトに語りかけるが、

「……」

完全無視である。

「もう～沢口君～」

「……なんですか」

不機嫌が微妙に滲んだ声。

「と、とりあえず町に行こう！　時間が勿体無いから、な！」

「そ、そうだね～それじゃ行こう行こう～」

４人の足取りは少なくとも軽くは無かった。

『……低い雲は雲量１０分の４から１０分の７で小さい、中高度の

雲は雲量１０分のから１０分の７で薄い、高い雲は雲量１０分の１から１０分の３で薄い、助言：第１目標を爆撃せよ』――時は午前７時。

「早くしろ！！　敵機だ！！」
薄暗い室内に響き渡る怒声。部屋には日本列島が書かれたパネルと敵機進入を示す豆ランプ。
「警報を発令しろ！！」
「ハッ！！」
その部屋に居たとある兵士が扉を破るように開け、隣の放送室に駆け込みブザーのスイッチを力に任せて押す、そしてけたたましいブザー音が鳴り出す。
「空襲警報発令！！　繰り返す！　空襲警報発令！！」――時に午前７時過ぎ。

虎林市

活気がみなぎり始め、虎頭の町――虎林市が動き出そうとする。この町には５００人ほどの在留邦人が住んでおり、彼らは有事――対ソ開戦となった場合、虎頭要塞の守備隊の指揮かに入ることが決定されていた。
「お～い、あそこの店どうだ？」
「向こうに甘栗が美味しかった店があったな」
お互いに別の方向を指差して言う。それをニタニタと笑う風間とカノン。
お互いに睨みあい、風間とカノンの意見を聞く前に２人はそれぞれの方向に歩き出す。
「ちょっと待て～」

カノンが沢口の肩を掴み、ヨヒトへは声で呼び止める。
「「？？」」
不振に思った2人がカノンに近づく。カノンはニッコリ微笑んで、
「いい加減にしなさい～！！」
2人の顔に強烈な一撃を叩き込み、
「「○×△□※！！」」
叩き込まれた2人は声に成らない悲鳴を上げ倒れた。
「まったく～2人はいつまで喧嘩してるのかな～？」
カノンの声がとても、怖い。
「な、なぁ」
引きつった笑みの風間が恐怖に負けそうな声帯を動かし、喋りだす。
「どうしたのかな～？　風間君～？」
「……とりあえず人通りの少ない所に行こう」
この4人に虎頭の人たちは不審な目を投げかけてくる。それもそのはず、カノンが見えない彼らは沢口が急に倒れた（不自然に）ように見えたからだ。
「とりあえず人気の無いところに行こうか～、あ、そうだ～風間君～何か買ってきて～」
相変わらずマイペースなカノンに風間が買出しを断ろうとするが、カノン達はもう歩き出しており、声を発するタイミングを失ってしまった。
「チキショウ……」

『空襲警報解除～！　空襲警報解除～！』
メガホン片手に敵が去ったことを伝える年配の在郷軍人が声を張り上げている。そしてそこにはつかの間の平和が戻ってくる。
「行ったようね」
「うん、行った行った！」

そこには防災頭巾を被った母と幼い娘、娘は胸にドロップの缶を大事そうに抱えている。
「今日はお米の配給が有るのに……アメさんたちは……」
「お母ちゃん、今日は白いご飯食べられるぅ？」
う～ん、と唸ると、
「いつもお兄ちゃん居ないのに我慢してるからね、そうしようか♪」
「わ～い！！」
この子の笑顔が見られるのなら私のご飯を抜いて良いかな、と心に呟き、出征中の息子を思い出すように空を見上げる。その空は薄曇だが、真夏の太陽を防げるとは到底思えず、今日も暑くなるんだろうと少し恨めしそうに空を見つめた後、娘の手を引いて町の中心に歩き出すのだった――時に午前7時半。

「2人とも～一体何歳なの～？」
語尾が延びるため、説教を受けているのに緊張感が中々生まれない。
「23です」「19歳」
仁王立ちのカノンの前には地面に正座した少尉と砲魂。ちなみにカノンは今年で17歳である。
「もぅ～」
困ったように声を上げるカノン。どうでもいいが日差しがきつい。
「買ってきたぞ！　月餅（げっぺい）だ」
風間が買ってきた月餅は、丸い形をした柔らかい生地が水分の少なくクルミなどが混ぜられた餡を包んでいる物だ。
風間は「本土じゃそう食えない代物だぞ」と言い、「ご苦労様～」とカノンが袋を受け取る。
「まったく～反省の色が見えないわよ～そんな人たちと久しぶりの町を歩きたくないから風間君～行こうか～」
「おぅ……って良いのか？　金髪ちゃん！！　お、おい！」

「あぁそうだ、この月餅あげるからね～」
慌ててカノンの後を追う風間。なかば強制的に置いてきぼりになってしまった沢口をヨヒト。
「「……」」
ソレによって降り注ぐ沈黙。通りから聞こえてくる喧騒がどこかよそよそしい。
謝るべきか？　ヨヒトの中に突然現れた思い。だがソレは口から出るほど粘度を持っていなかった。
「昨日は……すまなかったな……」
突然声を出す沢口。
「い、いや、別に……アレはなんと言うか、そのだな……」
思い出したように言葉を並び立てるヨヒト。
「なんと言うかな……やきもちやかせてゴメン」
「や、やきもちではない！　無いからな！」
いつに無く声を荒げるヨヒト。その顔は、紅い。
「くく……」
「わ、笑うな」
ヨヒトは自然と沢口から顔をそらす。その視線にはカノンが置いていた月餅。ヨヒトはソレを手に取り、袋を開ける。そこから立ち上がるのは自然と顔を緩ませる匂い。
ヨヒトは月餅と睨めっこをした後、沢口に振り返り、袋を差し出す。
「焼き立てだ」
「それじゃカノンに感謝してもらおうか」
袋をヨヒトから預かり、中の月餅を2つ取り出し、1個をヨヒトに渡す。ちなみに買って来たのは風間の苦労を労う(ねぎら)言葉は一度も聴けなかった。
「なるほど、そう言う事か……」
月餅を食べる2人を離れた路地から監視していたカノンと風間。

2人は通りへ出た後、急いで別の路地に入ったのだ。
「むふふ～私も考え無しに動かないわよ～」
「でもなんて言ってるのか分からないな」
「大丈夫～私は読唇術が使えるから～」
「頼もしいな金髪ちゃん！！　でもアイツら背を向けて言っちまうぞ？」
「誤算ね～」
その言葉にヤレヤレと肩をすくめる風間。
「まぁ一日で仲が戻ったんだし……良しとすっか」
「そうだね～」
そこでカノンが、あ、と声を漏らす。
「どうした？」
「そう言えば風間君の故郷って何処なの～昨日言ってなかったし～」
「俺の故郷？」と言いながら沢口達が歩いていったほうへ歩き出す。
「俺の故郷は我らが帝都、東京なんだ」
「東京か～捻りが無いわね～」
「俺の故郷に文句を言うな」
あそこには思い出があるんだ。
「家族は～？」
「親父にお袋、今年で5つの妹だ、3月にメリケンの大規模な空襲が在ったから今は広島に疎開してんだ」
「ヒロシマね～」
カノンもその名前は聞いたことがあった。確か中国軍管区の司令部があるところだっけと思い出す。
「手紙だと満州のように空襲が来ないんだと」
「おかしいね～司令部があるならトコトン殺られるはずなんだけどね～」
「嵐の前の静けさってやつか？」
「う～ん～」

神妙な空気が漂いそうになる前に、
「ま、そんな事あるはず無いよな」
「そうそう～運がいいな～ヒロシマ～」

「新たな目標探知！　数は２機です！」
「２機だけか？」
「……間違い在りません！　２機です」
「さっき警報を解除したと言うのに……」
「それでは警報は出しませんか？　２機と言う事は恐らく偵察でしょう」
　最近の敵機は攻撃する事無く、数度旋回して立ち去ると言った事を繰り返していた。
「う～ん」
　薄暗い部屋に電子機器の廃熱音がなんの変化も無しになり続け、時間の感覚が麻痺しそうになる。
「いや、出そう、各放送機関に空襲警報を発令せよ」
こうして再度の空襲警報発令が命令された――時に８時１３分。

「ま～だぁ～」
「もうちょっとよ、白いご飯が食べたいんでしょ」
　それコクリと頷くと退屈そうにしゃがみこむ幼女。
「雄大（ゆうだい）お兄ちゃんだって満州で頑張っているんだから、ね？」
　母親が言い聞かされるように言葉を紡ぐ。
「おい！　アレ！　Ｂ２９じゃないか！？」
　突然響いた声。その声の主を探すと半そでのＹシャツに国防色のズボン、ゲートルと帽子を被った３０代ほどの男性が夏を湛えた空に銀翼が３機、キラキラと光っていた。そう、２機では無く、３機だったのだ。その内、１機から何か白く丸いものが３つ現れる。

「落下傘だ！」
「それじゃ、乗機を撃墜されて脱出したんだ」
やったぞ、と拍手する人も居る。

「ラジオゾンデ（無線が取り付けられた気象観測機器）の投下完了」
「少佐、頼むぞ」
「任せて下さいキャプテン」
少佐と呼ばれた人物は慣れた手つきで照準儀に高度・対地速度・風向き・気温・湿度等を入れていく。
「ＡＰ（投下目標）のアイオイブリッジを確認……」
そして少佐は小さく呟く。
「Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ　Ｊａｐ」
機長の妻の名前を取り、『エノラ・ゲイ』と名づけられたＢ２９から少年（リトルボーイ）が投げ出される。その姿には躊躇も何も無い。少年はしばらくの間、捨てられたことに駄々をこねるかのごとく横向きにスピンしながら自由落下する。それも無駄と知ったのか、今度は尾部の安定翼が空気を掴み、放物線上に落下し、『エノラ・ゲイ』から切り離されて４３秒後、高度６００ｍで彼は太陽と化した。

Ｂ２９からまた銀色の何かが落とされるのを見た。自分のモンペに不安げに抱きつく娘。
「……お母ちゃん」
「大丈夫、大丈夫よ」
その瞬間、カメラのフラッシュのような硬質で鋭い閃光。そして彼女たちは、消えた。
彼女たちは自分が居たことを示す影のみを残して、消えた。

広島に現れた死の光。そしてソレを追うように大きな爆発。立ち上るキノコ雲。周りの気圧が急激に変化し、爆風が駆け出す。

爆風で飛び散ったガラスの破片が無数に顔に突き刺さり、鮮血の流れを止められない少女。
熱線に焼かれ、肌がズルリと蕩(とろ)け、目玉が視神経によって辛うじて脳と繋がっている憲兵。
彼ら、死に切れなかった人たちは本能に従い、助けを求め、生き残りたいため歩く。たとえその先に『死』しか無くても。

午前１０時頃

「にしても美味いな、月餅」
「むぅ、何処で買ったか聞けばよかった」
広島での惨状を知らない２人は暢気に月餅を食べていた。
「本土だと物資不足でこんなに美味いものも食べれなしな、やっぱり満州に家族を呼ぼうかな」
「沢口の家族？」
「昨日言ったろ？　九十九里で漁師をやってんだ」
今は久しくなった潮の香り、海鳥の鳴き声。全てが懐かしい気がする。
「それじゃ、戦争が終わったら、沢口は千葉に帰るのか？」
「俺に帰ってほしく無いのか？」
その質問にヨヒトはボンッと顔を赤らめ、
「ち、違う！　そんな事は無い！　優秀な砲兵を失うのは虎頭要塞の戦力低下に繋がるからだ」
虎林市の喧騒。人々が生きている事を伝える騒がしさ。自分が居て、沢口も居る。そう思うとなんだか胸の辺りが暖かく、心地よい。
昨日のソ連兵の侵入。もしかして私達は近いうちにソ連と戦わなくてはいけないのだろうか？　嫌だな、せめて一秒でも長くこんな時間が続いてほしい。
「ふふ……」

兵器の自分が何を思っているのだろう。
「どうした？」
振り向いて疑問を投げる沢口。彼の軍帽の鍔が太陽を受けて短く反射する。
「なんでも……ん？」
「？　なんだよ？」
「飛行機だ」
「飛行機？　航空隊の連中か？」
ヨヒトはしばらく音源の方向を探し、彼女の顔は東の空を向いたとき、ピタリと止まる。
「……見えないぞ」
「見えた……機種は分からん」
額に手を当て、ヨヒトが眺める空を眺める。そこには相変わらずの青と白の世界。
「！　見えた！」
沢口からすればただの黒い点が１つ、空に現れる。
ヨヒトからすればその点には翼が生え、飛行機の形を見せ始めていた。

ブウウゥゥウウウン。

一定のリズムを奏でる飛行機。それを沢口がハッキリ確認できるようになった時、
「……なんだ、アノ黒塗りの飛行機は……」
ヨヒトが黒塗りの飛行機と言ったもの。それはソ連軍の傑作戦闘機『Ｊａ－５』。低空での機動性は他の戦闘機の追随を許さず、低速でのループやインメルマンターンまでこなす優秀機だ。
「何だ、何だ？」
「こっちに来るぞ」

次第に緊張が高まる虎林市。
不気味な緊張に包まれる中、『Πａ－５』は獲物を決めた猛禽のように一気に高度を下げる。途端に、
ウゥウゥゥゥゥウウ！！
空襲警報のサイレンが悲鳴を上げる。そして『Πａ－５』の両翼につけられた２０ｍｍ機銃が猛禽類特有の爪のように鋭く撃ち始める。
虎林市は活気から一転、悲鳴が町をあふれ出す。
バシッ！　バシッ！
地面の土が飛び跳ね、そこに２０ｍｍ弾が直撃したことを告げる。それは一直線にヨヒトへ伸びる。
「避けろ！　ヨヒト！！」
沢口は叫び、ヨヒトに体当たりするように道の端へ押し倒す。ヨヒトに向かっていた２０ｍｍ弾は空を切り裂き、地面へと派手に突き刺さる。忌々しいエンジン音が頭上を通り過ぎる。
しばらく声を押し殺して様子を伺う。
そこでお互いに気付いた事があった。
（（顔が、近い！））
「さ、沢口……もう良いか？」
「え？　あ、ごめん」
飛び去った戦闘機は旋回を行い、そのまま東に向かって飛び去っていく。
「なんだったんだろうな？」
「さぁ、ソレより、高射砲の連中め、帰ったら、絞らないとな」
２人とも白々しく声をだす。
なんだろう、この胸の高鳴りは？

「それより助けてくれたのは嬉しいが私は魂であって体は『試製４１糎榴弾砲』だ」
「？？」
何を言っているのか分からないといった顔の沢口。ヨヒトは胸の高鳴りから意識を外そうと言葉を続ける。
「体が傷つかないかぎり、私は怪我をしない、だから、あんな無茶は、もうするな」
「へ？　砲魂ってそうなのか？」
以外、それが沢口の顔に浮かぶ。
「だが、ありが……」
喋っている後半は空気に混じってしまったヨヒト。
「え？　なんだって？」
「な、何でも無い！　ソレより要塞に戻ろう、また来るかもしれない」
恥ずかしさと胸の高鳴りを消すように早足で歩き出すヨヒト。
「おい、待てよ！」
それを慌てて追いかける沢口。その後、黒塗りの戦闘機は現れなかった。

第5話　戦争（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、本当にありがとうございます」

ヨヒト「長いな」

カノン「でも中身はグダグダよ～」

作者「ウッ！　確かにそうかも……」

カノン「そうなんだよ～」

作者「（あれ？　こういうキャラだっけ？）まぁ来週は文化祭で執筆出来ませんし、それに徒然に書いていたらこうなりました、これだけ書いたのは初めてです」

ヨヒト「中途半端な終わりの前作よりも長いしな」

作者「……貴方達、今日は言葉に棘がありますね」

ヨヒト「『艦隊決戦物語』の艦魂からそうしてくれと言われた」

作者「言われたってそれを実行しないで下さい。何ですか？　貴方は誰かに「××を殺せ」って言われれば貴方は××さんを……」

ズズーン！！

ヨヒト「煩いな、理性があればそんな事しないだろ」

カノン「それじゃ～ご意見・ご感想待ってます～」

第6話　気持ち（前書き）

まずお詫びを申し上げまあす。
大変遅くなり本当にスイマセン。
それでは本編をどうぞ。

第6話　気持ち

「お呼びですか、隊長」
「あぁ、大木大尉、６日に露助がスンガチャ河を渡河しただろ？」
砲兵隊隊長の大木大尉は『虎頭要塞』守備隊長の西脇武大佐に呼び出されて居た。
「はぁ、しかしアレは今まで在った……」
「『嫌がらせ』……だろ？　だが関東軍指令の清水中将は念のために我々を招集して高等司令部演習をするそうだ」
高等司令部演習とは各師団長や参謀・主要参謀、さらには軍直轄部隊長と対ソ戦における作戦の再確認が主な内容である。
「じゃこれから……」
「そうだ。掖河（えきが）の司令部に行ってくる」
「そりゃ、大変ですね、折角の大詔奉戴日（たいしょうほうこうび）だって言うのに……」
大詔奉戴日とは１９４１年１２月８日の『真珠湾奇襲作戦』の成功において国民精神を高めるために設置された記念日で、将兵には休養が与えられるのだ。しかしそんな休みを恨むように空は曇天によって占領されていた。
「まぁ、虎頭を頼む」
苦笑いの西脇。
「ハッ！　いただきます！」
上官に応える大木。これが最後の別れであることを、誰も知らない。

虎林市

軒先に掲げられた太陽。だがそれは虎頭の湿った風に疲れたようになびくだけである。

「遅れを取るな！　沢口！」
「おい！　待てよ！」
疲れた風が虎林市を吹き抜けるなか、沢口とヨヒトはそれを気にせず駆けていく。
「お前ら……なんでそんなに元気なんだ？」
「うふふ、今日は無意味におめでたい日なんだから～いいんじゃない～」
ヨヒトと沢口の後をトボトボと歩いていくカノンと風間。町の人々は『1人』で楽しそうに走っていく沢口に不思議な視線を投げかけていた。
だがそんなことはお構い無しに沢口は風になびくヨヒトの黒髪を追う。
「ここだ、ここ」
ヨヒトが走るのを止めた場所、そこは甘く、暖かな匂いが蒸気と共に立ち上る。
「へ～饅頭か……」
「包子（パオズ）だ、これが美味い」
包子とは小麦粉や酵母などを混ぜて発酵はせた柔らかい手のひらサイズの生地で具を包んで蒸した食べ物だ。
ソレを前に考え深そうに深げに腕を組み、目を閉じ、俯くヨヒト。彼女の軍帽についた金色の帽章が少し白い光を見せた。
「沢口、私は虎頭の『主砲』の砲魂、つまり私は砲魂として一番偉い。それを階級で表せば要塞の守備隊長並みだ」
彼女の肩に付けられた黄色の肩章に3本の赤線と3つの星、それで彼女が言いたいことが分かってきた。
「……なんですか、大佐殿……」
彼女の返答は予想できたが、それを確信に導くためにヨヒトにたずねて見る。
「買え」

ヨヒトは『買え』と命令した。そりゃ、階級とか関係なく彼女はそういったものを買えないから俺に頼んだのだろう。そりゃ、良い。そりゃ良いんだが、

「よ、ヨヒトちゃん？　それ１８個目だぞ？」

白刃に鈍い空を反射させた軍刀を構えて『２０個は買え』と仰りやがった。

「美味いものを……食べて……具合が……悪くなるほうが……珍しいはず」

「もう～ヨヒトったら～何か食べながら喋らない～」

そっちを注意すんのか、沢口が心の中で呟き、だいぶ軽くなった財布を揺する。ヨヒトはそれを察することが出来ず、鋭い目に嬉しさを滲ませて包子の入った紙袋をあさる。

「……もう無いのか……」

沢口の分まで口にしたのにまだ食い足りないと不満げな砲魂。お前の胃袋はどうなっているんだ？　そんな疑問が沢口ののどまで競りあがるが、ヨヒトがジ～と視線を送ってくる。

ヨヒトと沢口視線が混じる。沢口は慌てて視線をずらす。

「まだ食うの？」

沢口とヨヒトの視線が混じる。ヨヒトは慌てて声を大きくする。

「食う！！」

ソレをカノンと風間は薄い笑を浮かべる。

「女の子が『食う』とか言わない」

視点を探す沢口の口からはもう『金が無いんだけど』といった言葉は出ない、出してもその意見は意味を持たないから。

「むぅ……じゃ、もぐもぐする！！」

「それも微妙ね～」

やる気の無い雲が空を覆っていた。

空は太陽が消えた後、急に泣き出した。
それはこれから起こる惨劇を嘆くかのように。

太陽が没した後も大詔奉戴日が終わった訳ではない。虎林にある『虎頭要塞』の宿舎では煙草や少しの酒が振舞われ、不機嫌な奴は誰も居ない。
外は空から滴る雨の勢いが増して来ている。
空には時に閃光が煌く。それは雷ではなく、ソ連軍が打ち上げる照明弾。最近はよく照明弾が打ち上げられ、気にする奴は誰も居なかった。
「なあなな、沢口」
「？　どうした？」
酒が回りだしたのか、風間の頬は幾分、紅潮している。だが沢口の頬は酒が回っていることを伝えてくれていない。
「お前なぁ、女の子とイチャイチャしてくれちゃって～この～」
「そんな気はねぇよ……」
「そんな事言いやがって」
風間はコップに入った日本酒を一口、喉の奥に流し込んでから言葉をつむぎだす。
「かー！！　ふざけんな！！　羨ましいぞ、このヤロー！！」
イチャイチャはしていない、だが、ヨヒトは……。
沢口はそこで考えるのを止めてコップの中のものを飲み干すことに専念しだした。

すべてを洗い流すかのごとく、空から大粒の水が降る注いでくる。
やむ気配は、無い。

「……なかなか雨も風流だ……」
「こういうお酒もいいね～」
『試製４１糎榴弾砲』のドームの入り口でヨヒトとカノンはお互いに飲みあっていた。
「あと、つまみを買って置けばよかった……」
アレだけ食べてヨヒトはまだ食べるの～とカノンの笑顔が少し固まる。
「……今日は楽しかった」
ヨヒトの目の鋭さは相変わらずだが、口元が楽しそうに孤を書いている。
「ヨヒトがそんなに笑ったの初めて～」
「む？　そうか？」
外を静かに光、消えていく照明弾。
「……日本は戦争をするのだろうか……」
「……戦争は嫌い～？」
「そうじゃない。ただ……こんな日が……続けばなぁって」
ヨヒトは急に自分の軍帽を深く被りなおす。
カノンはヨヒトになんて言うか思考をかき回す。彼女がそんな事を言ったのは初めてだったから。
「私は、兵器の魂で……人間とは違って……でも、私は、今日のような日が……沢口と楽しい日が続いてほしいと思う自分が居て、ここが私に与えられた死に場所だと決意した自分が居る」
楽しく生きたいとか、そういう物じゃなくて、もっとこう……大切な何かがあって、それが決意を鈍らせる、ヨヒトはそんな思いに焦燥を感じていた。
「う～ん～そうだな～」
自分の中でヨヒトの答えになりそうな言葉を捜す。
「あ！　分かった～！　沢口君ね～！」
「？　沢口がどうしたと言うんだ？」
「ヨヒトも女の子なんだね～」

「もったいぶるな、言ってくれ」
もったいぶるなと言われたが、カノンは心の中で3秒数えて、ヨヒトをじらしてから、
「それはね～恋よ～」
言い切った。言い切られたヨヒトはしばらく氷のように固まった後、溶け出す。
「……恋？」
「そうそう～！」
「……カノンは酒に酔っているな」
「そんなことないよ～真面目に答えたよ～」
「じゃ、その答えは間違っている。外れだろうな」
自信満々に答えるヨヒト。
「じゃなんで間違っているのかな～」
苦笑ともつかない笑顔でカノンがヨヒトにたずねる。
「恋とは決定的な出来事……例えば、朝、曲がり角でパンを銜(くわ)えて曲がり角を曲がった時に美少女とぶつかるとか」
「ヨヒト～少し話し合いが必要ね～」
カノンの顔は固まるどころか引きつっていた。
「？？」
だが肝心のヨヒトは『なんのこっちゃ？？』と疑問符が頭の上に浮かび上がっていた。
「私は整備のためにしばらく虎頭には来れないから、その間に考えとくんだよ～」
そう言ってカノンはため息混じりに優しい光に包まれ、水克に転移してしまった。
「考えるも何もないだろ」
ヨヒトは1人呟き、コップの中を飲み干した。その味は何故か少し、苦いような感じがした。

第6話　気持ち（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました」

ヨヒト「更新がだいぶ遅かったな」

作者「いやはや、それがですね、文化祭があったり、横須賀行きたいと思ったり、模試があったり、横須賀行きたいと思ったり、文化祭の打ち上げがあったり、横須賀行きたいと思ったり……」

ヨヒト「つまり横須賀に行きたかったんだな」

カノン「しょうがないよ～作者は『夏なのに広島行くんですか？』って言われたんだよ～」

ヨヒト「そんなこと考えているんだったら小説を書け」

作者「横須賀！！」

ヨヒト「まったく……『艦隊決戦物語』の2期は未執筆なのに……」

作者「横須賀！！」

ヨヒト「さく……」

作者「よこ……」

ズズーン！！

カノン「しつこいネタは嫌われるよ～」

ヨヒト「話を聴いて、さっさと書けばいいものを……意見、感想待ってるぞ」

第7話　開戦（前書き）

今まで徒然に書いてきましたがいよいよです。
それでは本編をどうぞ。

第7話　開戦

重い排気音と小刻みな振動が突然止んだ。四角い独特のボディーが特徴の黒塗りの車――フォードモデルA・フェートンがモスクワにあるクレムリン城の前に駐車した。軽快な扉の音共に背広にソフト帽を被った男が車外に足を付ける。

「やっと重い腰を上げてくれたな」

彼は駐ソ大使の佐藤尚武（さとうなおたけ）は今日8月8日にソ連外相のモトロフと会談をすることになっていた。

佐藤は腕をズボンのポケットに押し込み、触りなれた金属の塊の感触を見つけて引っ張り出す。それは鈍い輝きを放つ懐中時計。針は5時少し前。日本時間だと午後11時あたりか。

「さ〜て……」

佐藤は背広のしわを直し、ネクタイを締めなおす。その顔は期待が殆どを占めていた。

何故？　それは日本が4月頃からソ連を通して敗色の濃くなった大東亜戦争の対米英和平交渉を続けていた、今回の面会では恐らくその答案が帰ってくるのだろう、と佐藤は思っていた。

ポツダムから帰ってきたモトロフに面会を頼みに頼んだのが報われた。

これで戦争が終わる。ひどく臣民を苦しめていた戦争が終わるのだ。灯火管制が解かれて町には温かい光が灯るのだろう。愛しいものが戦場から帰り、それを家族は祝福するのだろう。

佐藤の足取りは軽く、クレムリンの古城に足を踏み入れるのだった。

あぁ、出来ればこれが嘘であると誰か言ってくれ。

「分かってもらえましたか？」

佐藤の目はモトロフから渡された紙から離れない。それは和平仲介の答えでも新しい条約でもなんでもない。
「ドイツ国民が無条件降伏を拒絶したのちに味わったような危険と破滅から、日本国民を回避させるため、８月９日よりソ連政府は日本と、戦争状態に突入することとします」
佐藤は視界がグラリと傾いた気がした。
「……モトロフ外相、せめて、ソ連政府の通告を日本に知らせたいので、電報を打っていいですか？」
「もちろん差し支えありません。あなたは平文でも暗号でもそうする自由を持っています。もっともこの宣戦布告は、マリク駐日大使からも日本政府へ伝達されます」
佐藤は傾いた視界からモトロフを捕らえ、手を差し出す。
「３年間の厚遇を謝して、握手してお別れしたい。おそらくは最後の握手となりましょう」
モトロフは佐藤の手を取る。
「……ではさよならをいいたい。戦争は早急に終わるであろうが……」
日本はどうなるのだろう？　対米英戦で消耗しつくした日本に新たにソ連の宣戦布告。１０年後、この国はまだ世界に存在しているのだろうか？　アジアの一等国として君臨できているのだろうか？
佐藤がクレムリン城から大使館に帰るため、乗ってきたフォードに乗り込もうとする。その扉の閉まる音はとても重苦しかった。

「もしもし？　ヴァシレフスキーだ」
「あぁ、しばしお待ちください」
ヴァシレフスキー――極東ソ連軍総司令官アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ヴァシレフスキー元帥はソ満国境に近いチタ市の南西２５ｋｍにあった極東ソ連軍総司令部からクレムリンのスターリンへ２度目の電話をかけていた。

一度目に電話した時、スターリンは戦争映画を鑑賞中で２・３０分後にかけなおしてくれと言われたのだ。

そう、佐藤が宣戦布告状を受け取ったとき、スターリンは趣味の映画鑑賞をクレムリンで行っていたのだ。

「いや～、実に面白い戦争映画だったよ♪」

とても上機嫌なスターリン。ヴァシレフスキーは少し呆れながらも現状を報告する。

「同志スターリン、いよいよ攻撃開始です。我が軍は圧倒的に優勢であり、完全な奇襲に成功する自身があります。日本軍は満州から駆逐されるでしょう。勝利に疑いはありません！」

その声に同志は受話器口に愉快げな笑みを吹き込んできた。

「そうか、同志ヴァシレフスキー。オーチン・ハラショー！　前進し給え！　君の勝利の戦いもぜひ映画にして観たいものだね」

「同志スターリン、心から感謝します」

大地を大きく叩く音、立ち込める湿度の高い空気。空から降り注ぐそれはやむ気配も無く満州の大地を削り取っていく。

時刻はそろそろ明日――９日になろうとしていた。

「……」

それを虎頭要塞の主砲『試製４１糎榴弾砲』が据え付けられた直径３７ｍのコンクリートのドームの鉄扉が開かれ、そこから右手に見える虎東山の観測所を眺めていたヨヒト。

その心に残るのはカノンが言った『考えとくんだよ～』という言葉。何を考えろというんだ。まぁ、確かに沢口のことは気にかかるというか……いや、恋とは違うものだと思うんだが……。

だがヨヒトの中には霧のようにぼやけた『何か』がある。それは自覚していた。だがその『何か』が分からない。

……もしかしてカノンが言ったことのほうが正しかったのか？
「はぁ～」
考えても仕方ない。その結論に達したヨヒトは虎林にある兵舎から失敬してきた一升瓶をコップに傾けたが、酒はコップの半分にも満たない。
「はぁ～」
もう一度ため息をつき、照明弾で輝く空に視線を飛ばす。ヨヒトはソレを見ると『何か』とは違う黒い霧が心に湧き出していることに気付いた。その霧は重く、ヨヒトは照明弾から目をそらす。
ソ連は戦争をするのだろうか？　嫌だなぁ。何で嫌なんだ？　それは沢口と楽しい時間が過ごせないから……。
ヨヒトは照明弾をはっと見る。
「どうして……沢口なんだ……？」
カノンが居て、他の砲魂たちも居て、風間も居る。なのに、なんで沢口となんだ？
それに答える者は居なく、ただ、ソ連領から打ち上げられる照明弾が輝いているだけだった。

虎林

明日からの訓練に備えて体を横たえる将兵たち。虎林の兵舎には彼らの安眠を知らせる幸せそうな寝息のみが聞こえる。
「……」
だが、1人――沢口は風間に言われたことを考えていた。たしかに俺とアイツは仲がいい。
沢口は寝返りをして横を向く。
ふとヨヒトの顔が頭を過ぎる。三日月のように鋭い瞳。腰まで流れる黒髪。色白な肌。
もう一回寝返りをして天井を眺める。
何を考えているのかよく分からないヨヒトの顔が頭からそう離れ

ない。
　沢口はヨヒトと違って心の中の物がなんとなくだが分かっていた。それは悪い物ではないのだろう。だが、俺は人間で、ヨヒトは砲魂だ。だから……。
　でもその考えはなんとなくだが言い訳に聞こえてしまう自分がいる。
　そこまで考えて沢口は明日の訓練のためにも早く寝ようとした。この疑問も明日、考えればいい。
　沢口は目を閉じて闇の中に落ちていこうとした。

8月9日午前1時

　相変わらず地面を叩きつける雨。照明弾で輝く『虎頭要塞』。嵐の前の静けさというやつである。
ニコライ・クロイロフ大将指揮下の極東第1方面軍第5軍は夜陰に紛れて静かに前進を開始した。本来なら砲爆撃で日本軍の陣地を切り崩すのだが、　奇襲攻撃を成功させるためにそれは一切やらない予定だ。例外を除いて。
その例外――重火力要塞の『虎頭要塞』は開戦となればその火力を持ってシベリア鉄道のイマン鉄橋を砲撃、使用不能にするだろう。補給路を断たれることは今後の作戦にかなり良くない。
だから20cm榴弾砲6門の火力を持ってして『虎頭要塞』を沈黙させようとしていた。
他にも第5軍の兵力は3個狙撃師団、国境守備隊3の6万人を主力として、火砲950門、戦車・自走砲166両を有している。
第5軍の司令部では日本刀のように鋭い空気が充満していた。
「クロイロフ指令！　今のところ日本軍が我々に気付いた様子はあ

りません！」
どうやらこの前の于匣屯への浸入で警戒されているのではないか？　という心配は机上のものだったようだ。
クロイロフは腕時計の針の位置を確認した後、
「砲撃を開始せよ。目標は日本軍の虎頭要塞である」
8月9日午前1時5分、ソ連軍侵攻開始。

第7話　開戦（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、ありがとうございました」

ヨヒト「コレで開戦？　読者をがっかりさせるな」

作者「でもこっちの方がストーリー構成がやりやすくなるはずなんで……」

カノン「歯切れが悪いのね～」

作者「私は偉大な黒鉄先生や草薙先生達と違ってストックを作りませんから」

ヨヒト「ちなみに後何話くらいで最終回なんだ？」

作者「プロローグを入れて3話くらいかと」

カノン「あと3話か～頑張らないと～」

ヨヒト「でもカノンって前回はいつの間にか消えていたよな」

作者「まぁ、カノンは途中退場と……」

ズズーン！！

カノン「なんか言ったかな～作者～」

→文章では表現しきれない笑顔のカノン。

ヨヒト「……意見・感想を待っている」

第8話　砲撃（前書き）

7月に入って読者数を示すカウンターが止まってしまいました。サーバーさんには一刻も早い復旧をお願いしたいです。
何故って？　それはコメントと並んで作者の原動力になるからです。
※しかしそれが小説への更新速度とは比例しません（汗。

そして高校生最後の夏休みに入っても更新速度が伸びないこの小説をどうか見限らないように読んでください。
長々とスイマセンでした。

第8話　砲撃

闇に沈む虎林。空から恨めしそうに落とされる雨粒。何の前触れも無く響いた轟音と共に空を切り裂く金切り声。

『Ｂ－４（Ｍ１９３４）　２０３ｍｍ榴弾砲』の９８．８ｋｇもある砲弾はレシプロ戦闘機並みの速さで放物線を描き、雨と共に地に向かって飛翔する。その数６つ。

砲弾達は着弾と共にその内に秘めた莫大な運動エネルギーを開放して弾体に内蔵された鉄片を吐き出した。

虎頭要塞の将兵はその一撃で飛び起きる。

何ガ起コッタ？

雷や地震とは違う大質量と鋭さを持った轟音と地響き。そしてまた空を切り裂く金切り声。それはどこか近づいているようだった。

そう感じた瞬間、地を揺るがす激震が走りぬけ、床に立っていた者は足を取られて転んでしまう。外では民家が数棟、爆風でなぎ倒され、炎上していた。

「総員戦闘配置！！」

突如響く号令。寝間着から急いで国防色の戦闘服に着替える。その間も響く敵の砲撃。

「さ、沢口、だだだだいだいだい大丈夫か！？」

「お前こそ大丈夫なのかッ！？」

沢口の慌てる手は前後を逆にした戦闘帽を頭にかけていた。

「それより早く虎頭に行こう！」

「おおおおおう！！　ししし心配すんな！！」

本当に大丈夫なのだろうか？　友にそれを告げるか考えた時、唐突に全身に悪寒が走りぬける。

「伏せろ」

短く風間が言葉を発する沢口は体を反射的に屈め、両手で目と耳を覆って口を開く。そうやらなければ爆圧で鼓膜が破れ、目玉が飛び出る。本土で習ったことだ。
そして強い地震の揺れとそれと違い鋭い揺れが兵舎を襲う。
「クソッ！　露助か！？　舐めやがって！！　行くぞ！！」
なんて多人格な奴なんだ、その感想が頭を過ぎろうとした時、もう多人格な奴は鉄帽片手に走り出していた。沢口も前後が逆になったままの戦闘帽の上に鉄帽を被り駆け出す。
外は相変わらずの豪雨。地面に溜まった土色の水を踏み潰して虎頭に向かう沢口と風間だった。

その唐突な砲撃は『試製４１糎榴弾砲』からでもよく見えた。
「なんで……」
国防色だった軍服は水を吸い込んで色を濃くし、重さを増す。だがヨヒトはそれを気にせずに額に当てた黒塗りの双眼鏡で発砲炎の挙がった地点を睨みつける。発砲炎が上がるたびに浮かび上がる無限軌道とクレーンのついた重砲――『Ｂ－４（Ｍ１９３４）　２０３ｍｍ榴弾砲』。その傍らにはカーキ色をした詰襟の軍服を纏い、それと同色のベレー帽を被った少女が狙撃銃のボルトを忙しなく動かしているのが見えた。
「共産主義者どもが……」
彼女の頭に乗っかった帽子の真ん中には彼らの象徴――赤い星が描かれている。
どうでもいいが雨を吸ったスカートが太股に張り付き、ヨヒトの苛立ちを増幅させる。
双眼鏡を額から離したヨヒトは虎林の方に頭を向ける。
（沢口は無事だろうか？）
虎林は突然の砲撃に混乱していた。だが虎頭の守備隊はそこから走りよって敵を迎え撃とうとしていた。
「ヨヒト！　大丈夫か！？」

聞きなれたいつもの声。
「問題無い、沢口」
雨に濡れながら駆け込んできた沢口と風間はその勢いのままドームの中に駆け込み、射撃準備を整えだした。

「被害状況知らせ！！」
砲兵隊隊長の大木大尉の怒鳴り声。
「主要道路、通信網及び鉄道は破壊または切断されましたが要塞への被害は軽微、戦闘可能です！！」
「そうでなくては困る！！」
大木はなんてこったと困ったような顔をしながら怒鳴る。
守備隊隊長の西脇大佐は掖河（えきが）の第５軍指令部に出張中である。鉄道が切れたということはきっと帰隊はできないはず。となると……。
「大尉！　虎林の民間人が避難してきます！　どうしましょうか？」
「隊長！　イマン鉄橋への砲撃許可を！！」
津波のように押し寄せる質問。西脇大佐が不在の場合は砲兵隊隊長の大木がすべての指揮を執らなくてはならない。

どうする？

まず、民間人の非難が優先か？　それとも砲撃命令をだしてしまうか？　いや、そもそもこれは全面的な戦争なのか？　それとも局地的なことなのか？　関東軍司令部からは『静謐確保』が命令されているし、局地戦の場合は『試製４１糎榴弾砲』などを１発でも撃ったらその存在がばれてしまう……。
「まずは掖河の司令部に打電！　『虎頭方面砲撃ヲ受ケツツアリ』
次は民間人の収容を優先しろ！！」
この電文は掖河の第５軍から新京の関東軍総司令部へと伝えられ、『ソ連侵攻』の第１報である。

それから総司令部へは次々と『ソ連侵攻』を伝える電文が飛び交った。

虎林のある񞘾寧市の南の牡丹江市では第1方面軍から『東寧（とうねい）・綏芬河（すいふんが）正面ノ敵ハ攻撃ヲ開始セリ』『牡丹江市ハ敵ノ空襲ヲ受ケツツアリ』と次々に電文が送られた。

関東軍総司令部ではこれかが『全面開戦』なのか『一時的・局地的』かの判断が取れないで居た。いや、万が一でも『一時的・局地的』だと思いたかった。

だがその決断を下す関東軍総司令官の山田乙三大将は『ソ連侵攻はまだまだ先』と思い、大連に出張中である。だから、

『東正面ノソ連軍ハ攻撃ヲ開始セリ。各方面軍、各軍ナラビニ関東軍直轄部隊ハ、進入スル敵ノ攻撃ヲ排除シツツ速ヤカニ全面開戦ヲ準備スベシ』

と全面開戦を『発動』では無く『準備スベシ』なのである。

同日午前10時30分

「駄目です機長！　雲のせいで目標が見えません！」

爆撃手のカーミット大尉の声を聞いた機長――チャールズ少佐はもう3度目だぞ、と小さい舌打ちをしようとしたが、

「機長！　そろそろ燃料がやばいです！　引き返しましょう」

副操縦士の声に余計苛立ちが募る、だが無いものは無いのだ。アイツを落として、自らも燃料切れで墜落？　名誉の戦死ほどダサいものは無い。生きているからこそ名誉の価値が、意味が生まれ、感じられる。どっかの三流軍隊の連中に5時間は講義してやりたい。

「機長？　聞こえてます？」

そう、怪訝な顔をするな、と言葉を伝えようとするが、それは別の声に邪魔されてしまう。

「大変です！　燃料系統でトラブル！！」

「！　すぐに予備燃料へ切り替え……うわッ！！」

そこでチャールズの愛機が衝撃波で大きく揺さぶられる。キャノピーの外に浮かんだ黒雲が激しく上下する。
「ジャップの高射砲です！」
言われんでも分かっとる、と心の中で罵る。
「敵機！　五式戦闘機（トニー）と零式艦上戦闘機（ジーク）です！！」
機銃手の悲鳴。今ではすっかり旧式化した戦闘機……いや、爆弾か？　まぁ、どっちでも良いが三流軍隊が航空機を上げてきた。
「退避だ」
そのB29は反転、南西の方角に飛び去った。

同日午前10時40分東京、宮中

10時30分から行われるはずだった最高戦争指導会議は未だに始まっていない。そこには焦りを募らせたまだ若い陸軍の参謀たちが居た。
「遅い」
1人の参謀がぼやく。早朝にもたらされたソ連からの宣戦布告状。それを見越して陸軍中央の血気な参謀達が製作した『ソ連参戦にともなう戦争指導大綱』をこの会議において国家決定案（国策）とし、午後1時から行われる閣議を経て午後3時には御前会議で最終決定をもらい、午後5時には全国民に対し、「徹底抗戦あるのみ」と伝えるだけである。
そして午前11時、鈴木首相以下の主要メンバーが集い、一億総玉砕への道を突き進もうとした。
参謀の頭に窮鼠猫を噛むの一語が通り過ぎ、それは口元を三日月のように曲げさせた。
そこで連合艦隊司令長官や海軍軍令部長などを歴任した鈴木貫太郎首相が静かに、だが会議に参加したみんなに伝わる声で、
「広島の原爆とソ連の参戦という四囲の情勢からみて、戦争継続は

不可能である。どうしてもポツダム宣言を受託し、戦争を終結させるほかないと考えます。ついては各員の意見をうけたまわりたい」
ポツダム宣言受託を告げた。参謀達の思惑は早くも頓挫した。
ゆっくり、ゆっくりと太陽が高度を増す。だがそれさえも忘れたように声を発する者は、居なかった。

同時刻『虎頭要塞』

鈴木首相やＢ２９が行動を起こそうとしていた時、虎頭ではソ連軍の砲撃で死傷者は増え、要塞のコンクリートは砲弾の直撃で瓦礫と化す。
「大木大尉！　もうこれは全面戦争です！　反撃をしましょう！
それともこのまま座して死を待つのですか！？」
部下の声を聞かなくても分かっている。虎林の避難民およそ４００人が虎頭に居る。彼らの守るのが軍人の責務。
やるしかない。
「第５軍司令部に今の状況を打電、各、監視哨の兵は持ち場を放棄、『虎頭要塞』守備隊に合流せよ」
そこで部下たちの顔を見回し、
「１３００時を持って砲撃を開始する！！」
攻撃命令を出した。

同日１０時５０分

「ダメだ、雲のせいで下が見えません」
「……」
カーミットの声にうんざりと言った顔をするチャールズ。
このままだとアレを海に投棄して帰還しなければならない。なら

いっそレーダー照準で投下させてしまおうか？　いやいや、司令部からは目視爆撃が厳命されている。命令違反を起こしてまですることか？

思考をトレースするが結論が出ない。

「街が見える！」

目標のポイントから北にずれているが、問題は無いだろう。

「Ｔａｌｌｙ　ｈｏ（攻撃目標視認）！　雲の切れ間に第２目標発見！」

そして第２目標――長崎に太っちょ（ファットマン）は『ボックスカー』より投下され、広島に落とされた少年――リトルボーイの１，５倍の破壊力を持って、すべてを焼き払った。

そう、長崎医科大学に入院していた者、通院して病気を治そうと必死に生きていた人々も。

そう、捕虜収容所でナチスドイツに蹂躙されていた故郷に居る家族を、捕虜になってしまった自分の安否を心配している家族を憂う連合軍兵士達も。

そう、協会で神に祈りを捧げる信者、神に戦災に包まれた人々への恵みを祈る神父も。

その神の業火はすべてを飲み込み、焼き尽くし、殺しつくし、大切な人を奪いつくしていった。

その頃、長崎の被爆を、降伏を討論する東京を知るよしも無い国境間近の監視哨はソ連軍の砲撃により殆どが壊滅、もしくは自決を取っていた。

そして敵軍――ソ連軍も苦戦していた。夜から続く豪雨、それのせいで進軍が思った以上に進まない。しかも虎頭方面に点在する大規模な湿地帯。歩兵が進軍するのは容易だが、砲・戦車・重機関銃

などの重武装が泥濘(ぬかるみ)に足を取られ、そのたびに数人でそれを救助しなければならない。
だが確実に兵を前進させるソ連軍。それは川を流れる水が虎頭(い)要塞(わ)にぶつかり、二股になるように流れていくかのようである。

１２時５５分

「装填急げー！　もう露助は来ちまってんだ！」
倉庫から運び出された直径４１０ｍｍ、重量は１ｔほどある鋼鉄の塊が砲尾から装填される。それが終われば装薬だ。その量は醤油樽４個分。
「……」
その『試製４１糎榴弾砲』の魂――ヨヒトは目を閉じ、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。夜中の苛立ちはそこには、無い。
「装填完了！」
風間の（珍しい）真面目な声。
後は目標のイマン鉄橋への測敵はもうすんでいる。後は風・気圧・湿度など細かいデータを複雑な公式で解き明かし、射撃算定盤に叩き込んでそれを元に方位・仰角を調整してやれば良い。
そうした修正値を元に重い金属音を上げて『試製４１糎榴弾砲』が旋回、及び仰角の調整が行われる。
ドーム内に設置されたスピーカーがくぐもった音を響かせたかと思ったらブツッと音を出す。そして待ちに待った命令が聞こえた。
『１３００　命令に基づき我が砲兵隊は愈々（いよいよ）射撃を開始し、加農砲は対砲兵戦、榴弾砲はイマン鉄橋、特火点の破壊を実施す！』
「撃ちー方よーい！！」
第１砲兵隊隊長の竹垣中尉の声。
「来たか……」

小さく呟いたヨヒトの目はいつも以上に鋭くなる。そんなヨヒトは左腰に吊るされた軍刀を右手で引き抜く。カチンと澄んだ音、鞘と鐺金具（こぐちかなぐ）の間に闇を切り裂くような刀身。

「……撃ちー方始め！！」

「テェー」

中隊長の掛け声と共に沢口は力強く腰を使って紐を引く。ヨヒトはそれが引き終わる直前に抜刀、軍刀はその刀身の姿を露にし、白い孤を空中に描く。その光景を目にした沢口の目はその美しさに顔が釘付けになりそうになるが、途端、天地が裂けんばかりの轟音が辺りを制圧する。

保護林として植えられた木は皆倒され、土ぼこりが天を覆い、鼓膜が破れそうになる。

それに継いで『7年式30糎榴弾砲』も射撃を開始する。

その姿は虎が獲物を狩る姿そのままだった。

遠く、敵要塞の山腹から盛大な爆煙が空に打ち出されるのが見えた。

「なんだあれ？」

「さぁ、陣地に集積した弾薬が暴発したんじゃねぇの？」

間抜けな連中だと小銃を担ぎなおしたソ連軍の歩兵。ヘルメットを被りなおし突撃に備える。

途端。

後方から景気の良い大爆発が沸き起こる。

「なんださっきの？」

「さぁ、陣地に集積した弾薬が暴発したんじゃねぇの？」

コイツは答える気があるのか？　と呆れながら爆発の音源に頭を向ける。

「は？」

そこにはさっきの爆発で抉り取られたウスリー河の川辺。その周辺はさっきの爆圧で吹き飛ばされた砂や土、小石が空を舞っていた。

「暴発じゃねぇよ……絶対……」

「鼓膜が……」

第１砲兵中隊も『試製４１糎榴弾砲』の威力に呆れ居ていた。

「次弾装填！！　及び修正値知らせ！！」

観測所から飛んでくるさっきより正確なデータが送られてくる。だがその前に白煙を吐き出す砲身の仰角を3度まで下げ砲尾の閉鎖機を空け、耳を押さえる兵員が装填盤から砲弾を装填してやる。「急げー！！」と命令が飛ぶ。

「大丈夫か沢口？」

軍刀片手にヨヒトが心配げに聞いて来る（目は鋭いままだったが）。

「俺は平気だよ、でも凄いな、やっぱり。後、第5軍の援軍が来れば露助を撃退できるかもな」

沢口は『試製４１糎榴弾砲』の威力に酔いしれているようだった。それにヨヒトは、

「『かも』じゃない。するに決まっているだろう。援軍が到着する頃合には白旗が翻っている」

自信満々。その一言だった。

「第2射よーい！」

その言葉にヨヒトはチラリと中隊長を見ると軍刀の柄を握りなおし、中段の構えに構えたかと思うと、右足を半歩引き、刀身は僅かに右にそらした上段の構えに構える。

「よーい！　テェー！！」

「テェー！！」

沢口は号令をすかさず反復し、さっきと同じ動作をする。轟音と白煙。駐退複座機の効果で砲尾が大きく後退する。砲身からライフリングに沿って回転した砲弾は秒速５８０ｍで２０ｋｍ先のイマン鉄橋めがけて飛翔し、着弾と共に轟音と爆風、内蔵された炸薬によ

って鉄片を撒き散らし、兵士達の命を無情に切り裂く。
根気によって続けられた砲撃。その修正は段々、目標のイマン鉄橋に近づく。
「第１１射よーい！　テェー！！」
「テェー！！」
耳を突き刺す命を奪う砲撃。砲弾を送り出した後の砲身からは薄く白煙が風に流されていく。
弾着時間。それと同時に遥か離れたイマン鉄橋が爆煙に包まれる。
『目標、イマン鉄橋に着弾！　繰り返す！　イマン鉄橋の橋脚に着弾！！』
その声に耳を押さえうる兵隊達は相次いで万歳を連呼する。
「ばんざーい！！」
「ばんざーい！」
もちろんそれに沢口も風間も加わる。
「ふん……」
ヨヒトも満足気に口元を緩める。
「やったなヨヒト！」
「ん、まぁ、これくらい、なんてことは無い」
「あとカノンちゃんの砲撃があれば完璧だな」
照れを隠し切れないヨヒトに微笑みの視線を投げる沢口と風間。
誰しもが援軍が来れば完璧にソ連軍を押し返せると思っていた。
「で、伝令！　先ほど水克陣地が陥落したと……」
伝令の声に水克が？　と声が上がる。
「水克が……落ちた？」
「水克ってカノンちゃんが居たよな？」
「まさか……」
さっきまでの自信は何処にいったのか、これからを連想させる重い空気が虎頭に流れた。

第8話　砲撃（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、誠にありがとうございます」

ヨヒト「読者に泣きつくとは……」

カノン「……」
→なんかニコニコしているカノン。

作者「ですが読者数が分からないと『私しか読んでないのか……』ってなりますし……」

ヨヒト「……ふい」
→目をそらしたヨヒト。

カノン「……」
→なんかニコニコしているカノン。

全員「「「……」」」

←コソコソと。
作者「カノンはどうしたんです？」

ヨヒト「急に退場したからな、まぁ、取り合えず謝れ」

作者「でも……」

ヨヒト「ならいい、やるな」

作者「え？　でも……やりますよ、やれば良いんでしょ？」

ヨヒト（単純な奴だ）

作者「カノン……さん？　今回はスイマ……」

ズズーン！！

カノン「そう言えば私、この後はソ連に鹵獲されて行方不明なんだって～そうなんだ～うふふふふふふ～」

ヨヒト「……取り合えず意見・感想待ってるぞ」

第9話　8月15日（前書き）

あああああぁぁぁぁぁぁ！！
皆様本当にスイマセン！
でも許してくれますよね？
→ふてぶてしいですね、本当にスイマセン。

言い訳をさせてもらいますと、いつも土曜日に更新するようにして居るのですが、土曜は横須賀で米軍・自衛隊の両基地が開放されると言う事で、『小説のネタがあればなぁ』と、遊びに行ってきました。スイマセン！

日曜は校外模試があり、ほぼ一日を某国立大学で過ごしており、（ちなみにそこで友人に『横須賀行ったよ』と言ったら『余裕だな』と言われましたが、英語は殆ど己の運を信じて書きました）書けませんでした。

月曜はその疲れ（多分横須賀に行ったのだと思います）のせいか、執筆のスピードが低下しておりまして、今日になりました。

本当にスイマセンでした！

それと長々とスイマセンでした！

それでは本編へどうぞ！

第9話　8月15日

昨日の雨も上がり、虎林にはソ連軍と薄い靄が居た。昨日まで仲間と楽しげに語り合った兵舎は小銃で武装したソ連軍の兵士が占領していた。

「突撃ー！！」

硬質な日本語が空気を揺らす。その場に居た兵士はすかさず小銃の照準を声がした方に向ける。そこに現れたのは国防色の軍服を纏った日本兵。その手には狂気を湛えた軍刀。

鬼の形相で軍刀を振り回す日本兵を見てしまえば小銃を投げ出して逃げたくなる。

「同志諸君！　撃て！　撃て！！」

その声と同時に軍刀を持つ者とは違う日本兵が銃剣のついた小銃を無造作に撃ち始める。

「敵はどっち行った！？」

「待て！　俺は仲間だ！　撃たないでくれ！」

「がうあ！！」

「衛生兵！　衛生兵はど……グヴァ！」

「小隊長！！　小隊長は何処！！」

「少しは落ち着けって言ってんだろ！　このバカ共！！」

瞬く間にソ連軍は秩序を失い、混沌の世界に投げ出されてしまう。

「クソ！　日本人のぶんざ……」

1人のソ連軍兵士が兵舎の曲がり角を曲がり、そこに逃げた日本兵を撃ち殺してやろうとした時、

「天誅！！」

そこには朝靄のなか、決して失わない輝きを含んだ軍刀を高く振りかざした日本兵が居た。

「や、ややめやめ……」

そう言いながら来た道へ、命を延命させるために回れ右で駆け出

そうとする。そうだ、簡単なことだ、距離を取ったらアイツを蜂の巣にして……。
「うわッ！！」
こんな時に限って足がもつれ、うつ伏せになるように倒れてしまった。手にしていた小銃の位置は右前に５０ｃｍくらいの地面の上。だが日本兵の振り落とされた軍刀は紙一重で避けられたことを服を通して感覚神経が脳にしらせてくれた。
それから心のそこから這い上がる恐怖――俺はあの軍刀で引き裂かれてしまうと言う気持ちに心臓は誰かに鷲づかみにされたように鼓動を荒げ、息が乱れる。足や腕は誰かに押さえつけられたように自由を奪われ、ジタバタと手足を動かすしかない。それは案の定、全く前に進まない。小銃を急いで拾って反撃しようなんて考えが、思いつかない。
「いやだいやいだいやだ！　俺は死にたくない！　助けくれ！　死にたくない！　誰か！　助けてくれ！　お願いだ！」
唯一自由に動く口から出てくるのは生への願望。
「チキショウ！　俺の脚を抑えているのは誰なんだ！？　離せ！　頼む！　お願いだ！　おれは死にたくないんだ！！」
兵士の顔はもう凛々しい軍人の顔ではなかった。その顔は涙でグチャグチャになった、人間の顔だった。

「死ねぇ！！」
白刃が残酷なまでにキレイな孤を描き、うつ伏せになっていた敵兵の背中を切り裂く。
「ＡＡＡＡＡＡ（あぁぁぁぁぁぁ）　Ａｘ！　！」
そしてあふれかえる血と悲鳴。敵兵の手足は感電したように一度、ビクン！　と動き、それから必死に動き出す。何かを言っているがあいにく言葉が通じないから分からない。いや、通じても結果は同じだ。
「これで、終（しま）いだ！！」

前に2歩進み間合いをつめる。鮮血を吸って紅く、狂気に口を緩める軍刀がもう一度振り落とされる――それは敵兵の首に目掛けて力任せに。
敵兵の体から噴水のように血が壁を、敵兵を日本兵を染め上げていく。
その内、兵舎から煙が立ち上り始める。
「よーし！　引くぞ！」
その兵士は満足げに、血を飲んだ軍刀を握りなおして命令を飛ばした。

「テェー！！」
空を崩れるような轟音、そして鼻を刺激するのは硝煙。休む暇なく、砲尾の閉鎖機が回転したあと開き、そこに直径４１０ｍｍの砲弾が装填される。
「ちゃっちゃと装填しろー！」
風間が部下たちを急がせる。
『敵機来襲！　敵機来襲！』
「こんな時に……撃ち方やめだ！　撃ち方やめ！」
竹垣中尉はこのまま砲撃を続けていたら爆煙が目立ち、敵機の格好の的にってしまうと判断し、砲撃の中止を命令した。
「……」
黙ったままスピーカーを睨むように見つめるヨヒト。
「どうしたんだヨヒトちゃん？　そんな怖い顔して……」
「うん？　誰の目つきが悪いんだ？」
目を合わせるだけで相手を殺せそうなほどの殺気を含んだ瞳で風間に問いかけるヨヒト。
「いえいえいえいえ！　そんなお方はここにはいらっしゃいません！」
睨まれた風間は顔に嫌な汗を大量に貼り付けて否定する。

ヨヒトはそれを確認するとフイっとスピーカーに視線を戻す。
「……友軍の航空隊も来ないのか……？」

空を舞う猛禽の群れ。それは機能美によって生まれた鋼の猛禽。液冷エンジン特有の鋭い嘴（くちばし）を連想させる対地攻撃機――『ＩＬ－２Ｍ』は目標の虎頭にその機首を向けていた。
その胴体には１５０ｋｇ爆弾が４つ、黒光していた。
遠くから聞こえる砲声。続いて目の前に黒雲が突如として湧き上がる高射砲の反撃が空を制圧しようとしていた。

空襲警報の後にうなり出した高射砲の砲声。
「大丈夫なんだろうな？」
何時ぞやの『他の施設より鉄筋コンクリートの鉄筋が少ない』と言う噂を思い出してしまった沢口。もし敵の爆弾が直撃してしまったら……。
不吉なことを考えながら天井を見上げる沢口。
「心配するな」
ヨヒトは天井を見つめる沢口の鉄帽を後ろから一回、ペシッ！と叩いてやる。
「大丈夫だ」
沢口は天井から今度はヨヒト視線をいどうさせる。
「そうだよな」
「あたりまえだ」
なんの根拠も無いが、なんとなく、大丈夫な気がした。
「はいはい、見詰め合うのはそこらでいいか？」
風間の無粋な質問に見詰め合っていた沢口とヨヒトは慌てて視線を離す。
「み、見つめてなどおらん」
ヨヒトは何故か紅潮してくる頬を見られないようにするためにク

ルリと回れ右をしてしまった。
沢口と風間はお互いに顔を見合わせ、風間は、この～羨ましいね～を意味する視線を送るが沢口からは、どうすりゃいい？　とかみ合わないアイコンタクトをしていた。
「伝令！」
ドームの鉄扉を押し開けて兵員服に身を包み、片手に九九式短小銃を握った少年兵が竹垣中尉の下に走って行く。
「あれ？　相沢（あいざわ）？」
風間が1人呟く。風間と相沢とは階級は違えど、何故か親しい仲だ。
「手漉き要員は機関砲の給弾に2人ほど回ってほしいと……」
「給弾？　そうか……」
どうやら兵員が足りないので手の空いている奴は敵機が飛び交う中、重い弾装を持って走らないといけないようだ。
薄暗いドームの中を見回し、給弾に行かせる兵士を探す竹垣。みんなは思わず視線を在らぬ方向に向けたり、何かの作業をしようと動き出す。
「……沢口、風間！」
「「ハッ！！」」
厄日だ……と沢口は胸の中で吐き捨て、相沢と共に外に出ることになってしまった。

鉄扉の開く重い音が止んだ途端、徐々に明るさを増す隙間が大きくなり、それは隙間で無くなった時、そこには蒼を湛えた大きな空がポツンとあった。もしかしてこれが俺たちが見る最期の空なんじゃないか？　と不吉な考えが胸を通過した沢口だったが感傷に浸っていたのは1秒を10個に分けた時間だった。
空を震わす高射砲の怒鳴り声が遠くで響いている。いや、その音は大きいのかもしれないが『試製41糎榴弾砲』のほうが音が大きく、耳が麻痺しているのかもしれない。「まったくついてねぇな、

んで俺が……竹垣中尉は人使いが荒いぜ」
ぼやく様に言った風間の言葉は風間の後ろに沢口と風間の前に居る相沢の耳にちゃんと届いていた。
「抗命でありますか風間少尉」
扉から降り注ぐ陽光が相沢の笑顔の上に載った鉄帽を優しく照らしていた。
「でもよぉ、俺は本職の砲兵で、少尉だぞ？　高射砲兵とは違うんだよ」
「しょうがないだろ？　有事なんだから」
沢口は鉄帽の顎紐を締めなおし、青空の下に飛び出す準備を整える。
「沢口……」
沢口の後ろから聞こえた声に首だけを回して声の主を視界に収める。
「その……あれだ……」
軍帽を深く被った声の主に沢口は相沢に気付かれないように口元を緩める。
「なんだヨヒト？」
ヨヒトは何かを考えるような短い沈黙の後、いつもの日本刀のように鋭い瞳をキッと沢口に向ける。沢口は彼女が睨んでいるのではないことくらい察することが出来た、出会ってまだ1ヶ月も経っていないのに。
「……また、包子（パオズ）を食おう」
その言葉を聴くと沢口の緩んでいた口が誰にでも分かるように口元を緩め、
「……女の子が『食う』とか言うな」
そう言って扉から半身をだした相沢を目で行こうと促す。それに頷いた相沢は九九式短小銃を握りなおして走り出す。
「いく……」

「あ、ゲートル……」
突然、気の抜ける風間の声。……お前は周りの空気を読めよ……、声には出さないが、何も言わない口からため息が漏れ出てしまう。
「少尉！？　早く！　早く！　早くしてくださいよ！！」
外に駆け出し、塹壕に体を滑り込ませようとしていた相沢から発せられた言葉に風間は「おぅ」と答えるとマイペースにゲートルを巻きなおす。
「風間、お前な……」
「俺に話しかけるんだったらその複雑な心理を物語る顔やめろ」
風間がそう言うと沢口の返事も待たずに顔を下に向け、ゲートルを巻きなおす作業に戻ってしまった。ハァ……、とため息が聞こえたのは気のせいではない。
そのため息をつき終わった時、空気を一定感覚で震わす音が近づいてくることに気付いた。
「なんだ？」
風間を押しのけて扉から辺りを伺う。日の光が眩しい。
頭を右から左に向けたとき、鋭い嘴（くちばし）を持った猛禽が獲物に狙いを付けている最中だった。猛禽――『ＩＬ－２Ｍ』は緩やかに孤を描くように降下してくる。そして翼から黒いものが２つ、投げ出される。それは放物線を書くような緩やかな降下から角度とスピードを増していく。沢口はただその黒い物体を目で自然と追っていながら相沢の後を追おうとした。だが突然、襟首を誰かにつかまれ、人間離れした力で引っ張られる。
「ぐお！！」
沢口はキレイな孤を描き、押しぬけていた居た風間に倒れる、頭が襟首を掴んでいなくても倒れてしまうまで倒れたとき、襟首を掴んでいるのがヨヒトだと気付いた。
「何すんだ」と言ってやろうか、と頭に言葉が横に流れて行く。だがそれが粘度を持った言葉になる前に、耳を貫く轟音と爆風が沢口達を襲った。

そこであの航空機が落としたのが爆弾だったことに気付いた。爆風は満州の大地を抉り取り、乾きだした土を天に舞い上げる。『試製４１糎榴弾砲』が鎮座する鉄筋コンクリートのドームに鉄片が打ちつけられる。

そして爆風に乗って届いた臭い。とても臭く、沢口は今朝食べた戦闘配食のおにぎりを戻しそうになる。それは風間もヨヒトも同じなのか顔に脂汗を貼り付けていた。

「あ、相沢？　無事か？」

風間が臭いを取り払うように叫ぶ。辺りは砂塵に覆われ、声でしか安否を確認出来ない。

「……ヨヒト、ありがと」

もしあの時、ヨヒトに襟首を掴んで貰えなかったら……そう思うと心臓の鼓動が早まった気がした。

「気をつけるんだぞ」

額の汗を腕で拭いながらヨヒトが呟く。

「相沢！　返事しろー！！」

両手を口に当て、即席のメガホンにして風間が叫ぶが返事が、無い。

辺りに風が吹き出し、砂塵を片付ける。晴れていく視界の中、塹壕とドームの間に何かが転がっているのが見えた。

なんだが小さいスイカのようだ、と思った時、冷や汗が出てくる。もしかしてさっきの爆弾か？　不発弾だったのか？　処理はどうしよう……と考えた時、それが杞憂だった思った。

それは爆弾では無く、相沢の首だった。

「……」

目の前には１５０ｋｇ爆弾のせいで傷だらけになった塹壕、転に向かって薄くたなびく煙。もし、あの時ゲートルを巻きなおさなかったら……、風間の目が大きく見開かれていた。

「そんな……」
沢口の頭に素早く塹壕に身を滑らした相沢の背中の映像が再生される。
さっきまで小銃を握り締めて、さっきまで普通に会話して、さっきまで普通に笑っていたのに。
「……直撃の、ようだな」
ヨヒトは吐き捨てるように呟き、ドームの外に1歩踏み出てさっき爆弾を投下した航空機が当たりにいるのか探すように首を左右に向ける。
「おい！　相沢！！」
満州の蒼空に風間の声が轟いたが、蒼空にその声は吸い込まれるだけだった。

8月15日

ソ連軍からの攻撃も何故かなりを沈めたその日、虎頭の将兵は各々の戦闘配置で重要なラジオ放送があるから整列して待機、と命令されていた。
「なんの放送だと思う？」
風間の疲れきった顔から漏れた言葉。
「さぁな、多分、大本営か鈴木首相から本土決戦や対ソ戦への激励じゃないのか？」
硝煙で黒くなった顔を袖で拭いながら言葉を捜す。「まだ戦うのかよ……」と風間が言ったのは聞こえなかったフリをする。
「俺たちは……いつまで戦うんだよ……」
相沢が死んでから5日、ソ連軍は西猛虎山や中猛虎山が陥落させた。ソ連軍は山頂を占領しても必死の抵抗を続ける日本軍に手を焼いていた。
だから山頂付近に設置された地下壕の換気口に、ガソリンを流し

込んだ。
地下壕には虎林から非難して来た非戦闘員が居る。轟く砲声と弾着の激震が続く薄暗い生活を強いていた、無抵抗の非戦闘員の居る地下壕にガソリンを流し込み、火をつけた。
火に炙られるだけでなく、室内で燃え出した炎は酸素を非戦闘員から奪い続け、酸素が足りなくなれば一酸化炭素として人々を中毒死させた。

それに対して日本軍は白兵戦を挑んで敵を混乱に落としいれ、山頂を奪回することを繰り返していた。
開戦以来孤軍奮闘を続ける虎頭。だが関東軍はもとより第5軍からも援軍が来る気配が無い。しかも友軍の戦闘機1機も来ない。
将兵は口にしないが、何処までも暗い絶望が胸のうちに固まってきていた。

「総員整列！！」
竹垣中尉の声がむなしくドーム内に反響する。
整列して少し立つと、スピーカーからブツンとなってから『君が代』が流れ出す。聞きなれた国歌が最後まで歌われると、重苦しい空気を纏った声が流れ始めた。
内容は……まさに複雑怪奇、と言う言葉が多かった。だがその放送で分かったことが一つあった。
「日本が……負けた……？」
そこに居た者は何か考え深そうな顔とか、涙ぐむとかでは無く、ただ、呆然としていた。それは沢口も、風間も、そしてヨヒトも。
「神国日本が負けるはずが……」
どこかでそんな声がした。
「……私はどうすれば良いんだ……」
ヨヒトが呟く。そうだ、敗戦国の兵器はどう扱われるのだろう？
日清戦争や日露戦争では海軍は戦艦を戦利品として敗戦国からも

らっていた。
陸軍最大の火砲――『試製４１糎榴弾砲』はどうなってしまうのだろう？　いや、もし軍隊が解体されてしまったら俺はもうヨヒトとは……。
「ヨヒト……」
その後何かを言おうとした時だった。
スピーカーから別の声が聞こえだした。恐らくなんかの衝撃で別のスイッチが入ってしまったのだろう。
『天皇陛下……放送……あってたまるもん……第一に、第５軍……の停戦命令もない。戦意をそぐ……めのデマにすぎん』
所々切れているその声は大木大尉の声だとしばらく経ってから分かった。だが切れ切れの中、『停戦命令もない』『デマ』の２言は聞き取れた。
「そうだ！　これは露助のデマだ！　そもそも神国日本が負けるはじがね！！」
「その通りだ！」
何処からとも無く湧き上がる声。
「陛下の名前を語る露助共を殺せ！」
「俺たちはこんなもんじゃ戦闘を止めんぞ！！」
そんな中、沢口が呟いた声がハッキリ聞こえた。
「まだ戦うのかよ……」

第9話　8月15日（後書き）

作者「ここまで……」
ビュ！
→軍刀が作者の1寸手前で止まった音。
ヨヒト「言い残すことは？」
作者「沢山ありますのでお時間をくれませんか？」
ヨヒト「それが最期の言葉だな」
作者「え？　いやいやいや！！喋らして！！」
ヨヒト「問答無用」
カノン「まぁまぁ、話くらい聞きましょ～」
作者「カノン……」
カノン「それから殺っても遅くないわよ～」
ヨヒト「そうだな」
作者「……」
ヨヒト「話せ」
作者「……」

ヨヒト「何もないんだったら……」

作者「あああ！　在ります！　えぇーと……あれです！　あ……」
ズズーン！！

カノン「時間切れね～うふふふふふふふ～」

ヨヒト「退場してからカノンが狂ってしまったな……意見・感想待ってるぞ」

第１０話　狂気（前書き）

『アメリカは、人類史上初めて製造した２発の原子爆弾を８月６日広島に、８月９日長崎に投下した。また８月８日には、ソ連が日ソ中立条約を無視して日本に宣戦布告し、満州・朝鮮に一挙に侵入した。』

これは私の使用している石井進他１２名の人が著し株式会社　山川出版が出版した『詳説日本史　改訂版』の抜粋です。

つまり日本史Ｂの教科書から引用しました。
日米ソの殺し合いがたった３行で完結にかかれています。

この完結に書かれた文や私が書いている物が今から６４年前に、実際に起こり、人々が殺されて居る、そう思うと胸を締め付けられる思いがするのは作者だけでしょうか？

それでは本編をどうぞ。

第１０話　狂気

８月１７日

デマ放送があってから2日、『虎頭要塞』の中でもっともイマン河に近い『七年式３０糎長榴弾砲』２門と『四五式２４糎榴弾砲』を持った猛虎原陣地が陥落した。そこの砲兵は1人を覗いて玉砕してしまった。

敵の銃火に晒され、守備隊の人員は減るばかり。頼みの援軍は1個分隊も来る気配が無い。『虎頭要塞』に来るのは敵軍の戦車と航空機、砲弾に敵の歩兵、そして日増しに増殖していく絶望感。

俺たちは何処に向かっているのだろうか？　沢口はそんな事を呟きながら薄暗い通路を歩く。その後ろには疲れた顔のヨヒトがついて来ていた。

「軍使か、きっと降伏勧告だろうな」

ヨヒトが呟く。そう、虎林でソ連軍の捕虜になったという5人が白旗を揚げて『戦争終結』を知らせに来たと言う。

それと彼女はこの薄暗い地下通路の空気の重さに勝てなかったようだった。それは沢口も同じで、何か無駄な事を考えて、話題を探しているところだった。

「多分そうなんだろうな」

沢口の疲れきった体からはそんな呟きしか出てこなく、会話として成り立たなかった。ヨヒトはまた何かを言おうとしたが、それは粘度を持つ事無く霧散してしまった。

薄暗い廊下に2人の足音が空気を振動させながら響いていった。時折、ヨヒトの腰に吊った軍刀が小さな金属音を立てるだけである。

それはこれからの未来へ歩いているようだった。行った先にあるのは闇だけと言う未来。

どうせなら降伏してしまえばいい。沢口は兵士であるのにそう、思

ってしまった。
だが降伏してしまったらヨヒトはどうなってしまうのだろう。『虎頭要塞』を占領したソ連軍に鹵獲されてしまうのではないだろうか。いや、降伏依然に猛虎原陣地のように陣地が陥落してしまうかもしれない。
それは嫌だった。カノンがくれた月餅（げっぺい）を一緒に食って仲直りしたヨヒトを、虎林で包子（パオズ）を美味そうにヨヒトを、空襲の時、とっさに襟首を掴んで助けてくれたヨヒトを、見捨てるようなことはしたくなかった。
だったら『試製４１糎榴弾砲』の射手としてヨヒトを守るために１人でも多くのソ連兵を殺せばいい。
『降伏してしまえばいい』と思った心を吐き出すように短く息を吐き出した。

沢口になんて話せば良いのだろう。日ごろは気ままに言葉を選んではたわいも無い会話をしていた、８月９日までは。兵器は、私は平和を願って成ら無いのだろうか。

ヨヒトの腰に吊った軍刀がやけに重く感じた。その軍刀はヨヒトが『虎頭要塞』の主砲に着任した時、それまで『虎頭要塞』の主砲を担当していた『七年式３０糎榴弾砲』の砲魂から「虎頭を頼みます」と笑顔で彼女から彼女の軍刀を一振り渡された。
「虎頭を頼みます」そう言った彼女は１５日、彼女を運用する第１砲兵中隊は玉砕を遂げ、陣地は陥落してしまった。だとしたら彼女はもう居なくなってしまったのではないか。

彼女だけではない。日本と同盟国のドイツが生まれ故郷のフランスと戦争になった時、「平気、平気～　私はいたって元気だよ～」と空元気の笑顔で答えてくれた親友のカノンは「考えとくんだよ～」

と言って消えてしまった。
他にも１０日の空襲で１５糎加農砲や野砲が１人ずつ戦死してしまった。
その日には沢口と風間の友人の相沢と言う奴も、戦死した。
みんな私を置いて、逝ってしまった。

『考えとくんだよ～』の言葉を思い出し、前を歩くくたびれた背中を見つめるヨヒト。
彼は人間の始めての友人で、彼は身を挺して私を黒塗りの戦闘機の機銃掃射から私を守ってくれて、居るだけで楽しくて、この時が永遠であることを願ってしまうほどの存在。それが沢口だ。
そして怖くなった。カノン達のように、突然居なくなってしまうのではないかと。
それは嫌だ。だったらどうする？　私が１人でも多く沢口を殺そうとする敵兵を殺せばいい。
ヨヒトは疲れた顔から何時もの日本刀のような鋭い瞳を沢口の背中からその前に注いだ。

四方をコンクリートの壁で覆われた室内。天井からぶら下がる裸電球が虚しく輝いていた。
その部屋の壁には沢口とヨヒトが直立不動で立ち、その前に背中を見せる形で要塞の本部付きの中尉が、彼と向き合うように街でソ連軍の捕虜――その内１人は森と名乗った虎頭在郷軍人会分会長と他に捕虜になっていた４人を含め、６人がテーブルに腰掛けていた。
ソ連軍から渡されたと言う紙の内容を簡単にすれば、戦争は８月１５日に終わっている。武装を解除して投降しろ、と言う具合だ。
「……少尉」
「ハッ！」
中尉は体をイスから離しながらテーブルに置いた略帽を被る。そ

の際、彼の腰に釣られた軍刀がテーブルに当たって鈍いを音を奏でる。
「少し、奥に言ってくる。見張っててくれ」
沢口はそれに返事を返すと、中尉に敬礼をする。中尉が答礼し、腕を下ろしてから沢口は腕を下ろす。それを確認した中尉はソ連軍から渡された紙を片手に扉から出て行ってしまった。
「……戦争は終わって居ると言うのに……」
森が零れるように言葉を紡ぐ。やっぱり8月15日のラジオは本当だったのか？　沢口は森達に気付かれないようにヨヒトに視線を送る。
ヨヒトは『分からない』と黙って顔を少し左に傾ける。
「……少尉さん、貴方もさっきの人に戦争が終わったって言ってください。もう、戦う必要はないんです」
必死に森は語りかけてくるが、沢口はどうすれば言いか分からず、何も答えなかった。
「何か言ってください！　貴方も故郷に家族が居るんでしょ！？　会いたいでしょ！？　戦争が終われば本土に帰れるんだ！　家族に会えるんだ！」
森はそのまま嗚咽を漏らしだし、戦わなくて……良いんだと呟いた。
故郷に帰る。満州に来てから久しくなった海の匂い。あそこは本当に何も無い田舎だが、自分の帰りを待っている父さんと母さん、そして妹が居る。
家族には会いたい。でも……。
「待たせた」
思考は中尉が帰ってきたので中断する。
中尉はさっき座っていたイスに座る事無く手に持った紙を森に突きつける。
「よしソ連軍に伝えよ。我が軍はこの地を死守せよとの命令を受けている。我々はこの地を死守し、大日本帝国悠久三千年の大義につ

くのだ」
自慢げに言い切った先にある紙には日の丸のように紅く、太い線で『×印』が書かれていた。
「さぁ、早くそれを敵の司令部に届け……」
中尉が言い切る前にコンクリートの部屋に硬質な音が耳を撃った。沢口とヨヒトは思わず目を瞑ってしまう。その音は森がコンクリートの床にイスを押し倒して通路に飛び出そうとした。それは戦闘機が滑走路から飛び立つような荒々しいものだった。
「待て！！」
中尉の声に森や森を追おうとしていた4人も、沢口もヨヒトも動きを止めた。
中尉は森に歩み寄る。彼は被っていた略帽を深く被り直し、腰に吊った軍刀の鞘に左手を、柄に右手を掛けてる。
「森！東方に向かってそこに座れ！」
その言葉の間を縫って小さく、蒼空のように澄んだ音が響く。森の体は一瞬だけ鋭く震える。森は小刻みな音を立てながら言われたとおりに東を向く。中尉は右手で握った柄に力をこめて黒い鞘から一部の曇りも見当たらない白刃の姿を見せ、森の右真横に移動する。
鞘を握っていた左手は柄の鍔とは反対側の端――柄頭を小指で握り締める。右手は柄の真ん中よりやや唾よりに握っている。
中段の構えから右足を引いて腕を持ち上げる。上段の構えのように構えた後、中尉は真っ直ぐ刀身は森の首を叩ききった。
「ちゅ、中尉！！」
沢口が叫んだが間に合うものでは無かった。
森の首と胴体が分かれることは無かったが、何時ぞやの豪雨の時のように鮮血が傷口からあふれ出した。
森の体は頭の重さに引きずり込まれるようにコンクリートに生々しい響きをあげて前のめりに倒れ、動くことは無かった。
「あ……」
沢口の口から思わず言葉が出てくるがそれは後の祭りと言うやつ

である。沢口の顔には森の首から噴出する生暖かい液体が2・3滴頬に付くのが分かった。
「早く敵司令部に言って来い」
中尉の押し殺した声がコンクリートに反響した。軍使は怯えるように扉を出た後は廊下を走って逃げる音が部屋に届いた。
「中尉何故斬ったのですか？」
ポケットから布切れを取り出し、刀身を染めた紅をふき取ろうとして居る中尉。
「我らがこの地を死守するのは天皇陛下の御命令である。それを踏みにじる手紙を届けた上に逃げ出すとは死んで償わなければ成らない重罪だ。だから俺が斬った」
それはなんの理由にもなっていない。中尉は早く戦闘配置に戻れと告げると部屋を出て行ってしまった。
部屋には沢口とヨヒトと鮮血を流す死体だけになった。
部屋に充満しだす鉄の臭い。胃の中の物が全て外に出てしまいそうだ。
「沢口、早く出よう」
ヨヒトを見ると右手を口元に当てていた。それに頷いて死体をのこして部屋を立ち去ることにした。

俺はさっきソ連兵を殺してやろうと思った。だが『殺す』とはあんなにも簡単に『者』から『物』にしてしまう行為だと見せ付けられた。それはとても恐ろしいことじゃないのだろうか？　今まで何の躊躇(ためら)いも無く引き金を引き続けて来た。砲弾の着弾するその先で兵士を弾片と爆圧によって殺してきた。
そう、なんの躊躇いも無く。

途中、アノ部屋の方向に向かう兵員とすれ違った。きっと『片付け』をするのだろうと思うと、胃の中の物が喉を半分競りあがってくる。沢口は急いでそれを飲み下そうとした時、優しい温もりのあ

るモノが背中に置かれた。
「大丈夫か？」
その声に背中に置かれたモノがヨヒトの手だと気付いた。
「ありがと、もう平気だから」
「そ、そうか」
と頬を緊張の色で染めるヨヒト。
「慣れないことはさせるな」
そうヨヒトが沢口に告げると同時にヨヒトはそっぽを向いてしまった。それが何故か凄く人間ぽく見えた。そして可笑しかった。最初は笑をかみ殺していたが、ついつい沢口は吹いてしまった。
「む、失礼だぞ」
「いや、わりぃ……くっくっく……ってスイマセンでし……」
笑いに満ちた沢口の顔はヨヒトの鉄拳で歪みだす。
「……」
「……本当にスイマセン」
頭を抑えながら声を振り絞る沢口。

頭を抑える沢口の姿は初めて会ったときのことを思い出させる。あの頃――戦争が始める前までは毎日が楽しかった。そして、『人を殺そう』なんて、『何かのために人を殺す』なんて、思わなかった。それを平然と思える。それを平然とこなして来た。それは沢口やヨヒトだけでは無くソ連兵も日本兵も『誰かを守るため』『名誉を得るため』人を平気で殺してきた。それが戦争だ。
「……沢口、私は病気なのかもしれないな」
「……」
「私は平気でソ連兵を、殺してやると思った。私は『殺す』と言う行為に何の躊躇いも無くそれをやろうとしてしまった。平時だったら気が狂っているような考えを……」
ヨヒトは歩みを止めて顔を地面に向け、前髪で彼女の目が隠れてしまうほど頭を下げて居た。彼女の頬を温かい液体が撫でて地面に

落ちて行くのが見えた。
沢口は彼女が泣いているのを始めて見た。いつもはあの鋭い目線を送ってくるヨヒトが涙を流している。
沢口もさっき、ヨヒトを守るためならソ連兵を殺してやると思った。虎林をヨヒトと駆けていたアノ頃は全然思ったことも無いことを、躊躇わずに思ってしまった。

――俺も、病気だったのか……。

沢口の目の前で夜の月のように静かに涙を流すヨヒトを、兵器の魂だとは思えなかった。そして、その体に大きな苦しみを持っている姿はとても、儚いと思った。
だから沢口はヨヒトに静かに近づいた。

ヨヒトは思わず泣いてしまっていた。
自分は人を殺すための『物』だ。だがそれでも『殺す』と言う行為が『普通』に出来てしまうと言うのは気が狂っているとしか思えなかった。そして自分は『殺す』と『普通』に思ってしまった。そんな自分が『怖い』と思った。
目からはカノンが居なくなったときも、腰に吊った軍刀の前の持ち主が居なくなってしまったとときにも見せた事の無い涙が溢れて止まらなくなった。
だが突然、温かい存在が自分を抱きしめてくれたのを感じた。
「……もう、いいんだ」
沢口はそう言ってくれた。彼の温かさが急に増した気がした。ヨヒトは恐る恐る自分の両腕を沢口の後ろに回した。沢口の背中の後ろで両腕を組むと、また涙が溢れてきた。さっきまでの『怖さ』では無く、『安心』から涙が止まらなかった。

第１０話　狂気（後書き）

作者「読者の皆様、ここまで読んで下さり、ありがとうございます」

ヨヒト「最終回目前だな」

作者「予定ですと後２話くらいで連載終了です」

カノン「長かったね～２ヶ月は～」

作者「はい、長かったです」

ヨヒト「書き終わったら『艦隊決戦物語』の続編か？」

作者「……」

カノン「どうしたの～」

作者「アレを読み返すと、なんか、文章が酷いな～と思って……」

ヨヒト「『改定する』って言ってから全然改定されてないからな」

作者「……アレ、書き直します、そんで終戦まで書きます」

カノン「アイディアが無いだけじゃないの～」

←ボソリと。

作者「……それも在りま……」

ズガアアアアアアン！！

→４６ｃｍ砲弾の着弾音。

ヨヒト「……続きを楽しみにしていた奴、本当にすまないな。それでは感想と意見を待っている」

第11話　終（前書き）

タイトルは『終』ですが、エピローグを入れるので最終回ではありません。

それでは本編をどうぞ。

第11話　終

8月18日

「なぁ、沢口」

薄暗いドームの中で朝食として出された乾パンを口に運んでいた。

「なんだよ、金平糖(こんぺいとう)はやらんぞ」

沢口も声を昨日帰ってきたときに目を腫らしたヨヒトの顔と沢口の顔をしつこいほどマジマジと見比べ、ヨヒトの鉄拳の餌食になった友人に返す。

「……白い飯が食いたいな」

「欲しかったんだな、金平糖」

木綿の袋に入った乾パンと金平糖を守るように沢口は左手でしっかりと握りなおす。

「戦争が終われば家族全員で腹いっぱい食えるかな」

「どうだろうな」

風間の顔はなんでそんなに淡白な反応するのかと問いつめていた。

「でも、食いたいな……最後に食ったのは、満州に行く前夜だったな」

沢口はお米のほのかな甘さを思い出すように遠くを見つめるように、『一番美味かったな』と付け足した。

「こっちもそんな具合だなぁ。母ちゃんが自分の着物2・3着で交換してくれたって言う飯だったからな……美味かったなぁ……」

「昔読んだ小説に幸せを語った兵士が真っ先に蜂の巣になる描写があったぞ」

聞きなれた少女の声に沢口と風間は幸せそうな表情のまま、固まってしまった。

少女はそれをお構い無しに沢口の握った木綿の袋を奪い取って中身を物色しだした。

「今度、貸そうか……？」
少女は袋の中にあった金平糖を一掴み取り出し、手のひらの上に置くと金平糖を凝視しだした。そこには様々な色がついた星のようにうっすらと光沢がある。その粒をマジマジと観察した後、金平糖は少女の口の中に消えた。
「……？　あ！　俺の金平糖！！」
沢口は慌てて袋の奪還作戦を行なうが、帰ってきた袋はだいぶ軽くなってしまっていた。
「あの……ヨヒトさん……」
ヨヒトと呼ばれた少女は口の中の金平糖を無造作に噛みながら、
「甘味は良いな」
満足げな視線を沢口に送っていた。彼女の手には戦利品の乾パンが「これでもか！」とばかしに握り締められていた。
「……」
「沢口、そんな羨ましそうな顔をしても渡さないからな」
奪った本人が何を言っている。そう言おうと思ったが、彼女の口元が緩んでいるのを見ると何も言えなくなってしまった。だから沢口の口から大きなため息が漏らした。

「装填急げ！！」
中隊長の竹垣中尉の掛け声に兵士達が慌しく1トンほどある砲弾を砲尾に押し込む。その兵員の顔は硝煙と汗のせいで真っ黒に光っている。
その様子を見守る沢口とヨヒト。
ヨヒトはなんとなく沢口の顔に視線を移す。
昨日自分を抱きしめてくれた事を思い出すと、今でも顔が紅潮しそうだった。でも、嬉しかった。そしてカノンの『恋だよ、恋だよ～』と言う言葉。もしかして私は……。
「装填完了！」
ヨヒトは兵員の号令を聞くと、腰に吊った軍刀を鞘から引き抜く。

その刀身は開戦当初のような輝きを失い始め、所々に刃こぼれやひびが生まれていた。
「……閉鎖！！　……よーし！！」
「撃て！！」
「テェー！！」
骨を砕かれるような轟音、そして巻き起こるのは白煙と砂煙。視界は一挙に悪くなる。ヨヒトはその『テェー』の声に合わせて軍刀を振り下ろす。その時、軍刀から雪のようなカケラが地面に落ち、霧散した。
「……」
それを無言で一瞥したヨヒトは振り下ろした軍刀を見つめる。
「ヨヒト？　どうかしたのか？」
くすんだ帽子の下から沢口の目が2つ、ヨヒトを見ていた。

あの時、虎林に黒塗りの戦闘機が来た時、沢口が私を助けてくれた時と同じ胸の高鳴り。
私は沢口達、いや、沢口とあの楽しい日々が永遠に続いて欲しいと思った。
ソ連もアメリカも日本も気にせずに、沢口と笑っていられたアノ頃。その永遠を願った私。その理由はやっぱり……。

「沢口……」
その想いを口に出したいと思った。沢口に知ってもらいたかった。でも鼓動が勝手に忙しくなる。口から言葉が出てこない。
「よ、ヨヒト？」
沢口の顔に疑問と驚きが浮かんでいる。早く言わねば……。
「……俺も、ヨヒトに話がある」
そう言った沢口の顔は硝煙で黒く染まっていたが、少し赤みを帯びている気がした。
「うん、なんだ」

ヨヒトが放った言葉はヨヒトが伝えたかった言葉では無かった。
「……俺は……」
「沢口、スマン、腹が痛い」
「「はっ！？」」
突然別の声が乱入して来た。その乱入して来た声の主は、
「風間……そんな事言われてもな……」
「そう言うな」
腹を右手で押さえた風間は顔色が青い。
「厠行って来る……」
「行け行け、赤痢だったらうつすなよ」
「いや、もう帰ってくるな」
背中を見せた風間に機関銃のように言葉が浴びせられる。その背中は遠近では無い事で小さく成って行くようだった。
「装填完了！！」
沢口は音源を一度確認すると、
「また後で」
ヨヒトに背中を見せた。

軍刀を見つめて居たヨヒトを見て、俺は虎林で生まれた想いがまた、大きくなるのが分かった。
ヨヒトと虎林を駆けるたびに、ヨヒトが幸せそうな笑みを見せるたびに、その想いは成長して来た。
8日だっただろうか、酔った風間に言われ、その想いが何なのか、分かった。
だから、一際成長したその想いを、伝えたかった。

「伝令！」
血で染まった兵員服を着た兵士が扉を開けながら大きな声を出す。
彼の襟には赤い襟章、つまり歩兵を現す襟章が付いていた。
「中猛虎山が、ソ連軍に落とされました！！」

ハッキリと耳に響く不安。
「他の歩兵部隊は！？」
「只今、陣地奪還のため、部隊を編成しております！！」
竹垣中尉はドームの中から右前の方向にあるはずの中猛虎山の山頂を睨みつけた。
「お前！　中に入れ！　信管の調整はしなくていい！　中猛虎山の山頂を砲撃する！」
ドームが重い音を響かせて回りだし、射角も変更される。
「中尉！　中猛虎山への射撃諸元はありません！」
１人の兵士が竹垣中尉に進言する。それはもちろん、『試製４１糎榴弾砲』はイマン鉄橋の撃破が主目的で、中猛虎山に砲弾を撃つことなど想定していなかった。
「直接射撃で撃て！　敵を驚かせればそれでいい！！」
強引な命令でドームが動き出す。
「沢口、さっきの話なのだが……」
口ごもりながら喋るヨヒト。その視点は定まっていない。
「俺は、ヨヒトが好きだ」
ヨヒトの三日月のような瞳が驚いて満月のようになる。
「虎林を楽しげに駆け抜けているヨヒトが、俺は好きだ」
沢口は顔を赤くさせながら口を動かす。
「饅頭を美味そうに食ってるヨヒトが好きだ」
ヨヒトの顔も、沢口と同じくらい赤かった。だがそれを隠そうとはしなかった。ただ、沢口の顔を見つめて、彼が放つ言葉を聞き漏らさないようにしていた。
「他にも、ヨヒトは虎林でなんだかんだで３０個くらい包子（パオズ）を食ったり……」
「は？」
「勝手に人の金平糖を食ったり、乾パンを奪ったり、後は……あ、いや、スイマセンでした」
「……バカ……」

ヨヒトはそこで一発、鉄拳を賜らせてやろうかと思ったが、思っただけに止めておいた。そんな事をするより、沢口の話を聞きたかった。
「……それでも、俺は、ヨヒトを愛してる」
「私もだ！」
勢いに乗って言ってしまったが、もっと何か言うべき言葉があったはずだ。でも、私はそれを言えない、きっと止まってしまう。
「ありがと」
沢口の顔は熟れたトマトのように赤いが、それでも笑っていた。
「そんなこと……」
ヨヒトも沢口に負けないほど顔を紅潮させていた。でもヨヒトは幸せだった、自分も愛されていたことを知ったから。
「「……」」
2人とも急に恥ずかしさがこみ上げ、風間が居なくて良かったとも2人は思った。
「……な、なぁ、キス、してくれるか？」
ヨヒトは今までに無いくらい顔を赤くして小さく呟いた。
「あぁ」
沢口はヨヒトに体を向け、昨日のように優しくヨヒトを抱きしめた。
ヨヒトは思わず目を閉じて顔を上に向ける。きっと今私は滑稽な姿なのだろうと思考が回る前に、口に柔らかくて温かく、優しい物が触れた。
ヨヒトも昨日沢口を抱きしめたというのにまた、恐る恐ると細い腕を沢口の背中に回した。

あぁ、この時が、永遠に続いてくれたら……。あの時、ソ連とかアメリカとか日本とか考える事も無く虎林を駆けたあの楽しい時が、沢口に想いを伝えたあの時が、沢口とキスをしているこの時が、永

遠に続いてくれたら。

その時間は短かったのか、長かったのか分からない時に沢口はヨヒトから口を離した。

「……ありがと」

もう、我慢出来なくなったのか、ヨヒトは軍帽をしっかりと被り、顔を逸らしてしまった。沢口もヨヒトと同じく顔を逸らし、自分の配置に戻る。

そこで中猛虎山の山頂から雷が落ちるような音が鉄筋コンクリートのドームを震わし、すぐに地震が起きる。天井からはその衝撃で剝離した破片が降り注ぎ、鉄帽に乾いた音を立たせる。

「急げ！！」

竹垣中尉の声もどこか色あせて聞こえる。

5秒ほどで降り注ぐ敵の砲弾は止む事を知らない。撃たれる度にその揺れとコンクリーの剝離が大きくなる。

「……もう。ダメなのか……？」

顔の赤色が引いてきたヨヒトが漏らすように言う。

今のところ、『試製41糎榴弾砲』の旋回はまだ終わらない。友軍の歩兵部隊も来ないようだ。いや、来ても間に合わないだろう。

その場に居る殆どの者が配置から離れ、呆然としている。そしてそれを怒鳴る姿は無い。

あぁ、死ぬのか……でも嫌だな、せっかくヨヒトに好きだと言えたのに……。

沢口の頭に浮かび、沈んでいく思い。近づく着弾。『試製41糎榴弾砲』から1歩さがり、日本陸軍が作った最大の大砲を眺める。そうやっているのはあとどれ位の時間なのだろうか？

「沢口……」

ヨヒトの呟きに沢口が振り返る。そこには戦争が無かったら出会

わなかったであろう少女の姿があった。
「もう、戦争は嫌だな」
俯きながら言ったヨヒトの言葉を沢口は聞き漏らさなかった。
「あぁ、戦争の無い、平和な世界で会いたかった」
「でも海軍を志願していたんだろ？」
日本刀のように鋭い瞳が問いを投げかける。
「そうだけど……」
そう言えば皮肉なものだ。戦争が始まったから軍に志願して、思い出したくない事があって、陸軍の士官学校で砲兵になって……つまり戦争が無かったら俺は軍隊に入らなかったのか……。
思考が頭を駆ける中、立っていられないほどの揺れが伝わる。それと同時に天井から大きなコンクリートが重力に従って床に落ちる。
「もっと普通に出会えて、あの輝くような日が続けば良かった……」
「楽しかったな、あの日が永遠に続くような気がしていたのに……なんで戦争なんかやるんだろうな」
思い浮かぶのはヨヒトと過ごした虎林。今思えばあの頃は全てが輝いているようだった。あの時はそう思わなかったのに、だが輝いていたのだ。何をしても楽しくて、退屈と言うものを忘れるほどだった。
包子（パオズ）も、楽しかった虎林の町も、輝いて居た物全てが、戦争によって全て失われてしまった。
「包子（パオズ）を食うって約束、守れなかったな」
１０日の空襲の時に約束した事。だがそれは守れそうに無い。
「もういい」
ヨヒトは細い腕で沢口に抱きつく。
「最期に、もう一度だけでいい……キスを、して、くれ」
最後は蝋燭（ろうそく）の炎のが消え入るような声だった。だがその大きさは気持ちを伝える分なら、十分だった。
「あぁ」
沢口も優しく、ヨヒトを抱きしめる。

お互いの唇が、ゆっくりと触れ合う。それはお互いの存在を確かめるように、虎頭で、出会い、虎林を駆けた相手を確かめるように。

だが戦争はそんな2人から永遠を奪い取った。

天井が裂け、そこから優しい光が差し込む。それは1人の砲兵と1人の砲魂を祝福するように包み込む。だがその時間はあまりに短く、1秒を10個にも満たない時間だった。『試製41糎榴弾砲』の鉄筋コンクリートのドームに飛び込んだ直径76mmの榴弾は瞬く間に炸薬が弾殻を破壊し、弾片が、熱が『試製41糎榴弾砲』の将兵を襲い、命を奪った。

鉄筋コンクリートのドームはその衝撃で傷口を広げ、5秒間隔で着弾する砲弾に、天井は砕け落ち、中に居た将兵の殆どを押しつぶしてしまった。

それはお互いの愛を誓い合った砲兵と砲魂もその崩落に巻き込まれ、もう、動く事は、無かった。

――ヨヒト、次会う時は戦争の無い世界で、普通に出会って――

――沢口、今度私たちが平和な世界で再会したら、普通に笑って――

――――普通に恋をしよう――――

第11話　終（後書き）

作者「ここまで読んで下さり本当にありがとうございました」

ヨヒト「私も戦死か……」
→頭に輪が付いているヨヒト。

カノン「でもソ連軍が『虎頭要塞』攻略後にヨヒトを鹵獲して持ち帰ろうとしてイマン河に浮かべた船にヨヒトを乗せたら重過ぎて船が沈んだんだって～」

ヨヒト「……」

作者「……船魂の方は気の毒ですね、まぁ、砲身のみで75．8き……」
ズズーン！！

ヨヒト「ちなみに単位はグラムだ！　いいなグラムだからな！　決してキログラムではないぞ！！　それが分かったら感想と意見を書いていいぞ！」

エピローグ（前書き）

今まで私の稚拙な小説に付き合ってくださった皆様、本当にありがとうございました。

それでは最終話をどうぞ。

エピローグ

虎林を車で出てからしばらく経つ。マイクロバスの中では楽しげな日本語が飛び回り、静寂を知らない。運転手の脇に立つバスガイドの声はなんだかカンペを棒読みしているような声で、聞いているものは、居ない。

「お父さん、そんなに饅頭買ってどうするんです？」

隣に座った４０代に成るか成らないかの歳の女性が怪訝な目線を投げかけてくる。

俺は通路を挟んで反対側の席に視線を送って見る。そこには楽しげに騒ぐ中２の少年と同い年の髪の長い少女が居た。

少年の方は俺の孫で、隣の女性の息子だ。少女は×××ちゃんと言って、２・３年前に近所に越してきた子だ。今回の旅行は女性の夫も行く予定だったが急な仕事が入ったと行けなくなり、代わりに×××ちゃんの家に聞いてみた。快諾だった。

そんな光景を微笑しながら女性の問いに答える。

「昔の友人の彼女が大食いだからな……」

俺は横に流れていく景色を眺める。外は快晴、蒼い空は明るすぎて暗いくらいだ。絶妙な温度と湿度を湛えた空気はまぶたが重くする。

あの時、１９４５年の８月１８日、鉄筋コンクリートのドームが砕け落ち、自分の中隊が全滅した時の感情は悲しいとか、そういうものでは無く、途方に暮れたと表現したほうが良い。

だがそれからの記憶がアヤフヤだ。魂が抜けたようだと言う感じだったから。だが、他の砲座に行っても血の臭いと『死に底無い』と言われたことは覚えている。

全ての戦闘が終了したのはアノ月の下旬に差し掛かった頃。それ

から今まで殺してきたソ連軍の将校に『ウラジオストックに行くぞ』と言われ、日本に帰れるのかと思った。早く家族に会いたい、戦争が終わっているのならきっと疎開先の広島から東京に帰ってきているのだろうと思った。家族の安否が分かったらどうしようか？　早川の家族に早川の事を伝えるべきか？

だが、そんな心配をするのは杞憂に終わってしまった。俺たちは日本に帰るどころかシベリア鉄道で極寒のシベリアに送られてしまった。

そこで意味の分からない土木事業に従事した。一回、凍傷になりかけたこともあった。

朝起きたら昨日の夜、家族の事を幸せそうに話してくれた奴が凍死していたと言う事もあった。沢口の金平糖を奪った時のヨヒトちゃんの話を思い出した。

年月にして3年くらい働かされて、そこでも死ねずに俺は日本に帰ってきた。

１９４８年だったと思う。東京の実家に帰ってもそこには、家と家族は居なかった。

ちょうど居合わせたハルピンに医者として行っていた友人に会った。酷い顔をしていた。悪夢をよく見て眠れないそうだ。

そいつの話だと、広島に、８月６日に原子爆弾が投下されて、大勢の人が死に、今なお苦しんでいると聞いた。そして家には家族が居ない。それを聞き、今の状態を合わせて考えたら目の前が真っ暗になりそうだった。

どうしようかと思ったが、沢口の事を沢口の家族に伝えようと思った。

汽車の中は混雑と言う物を5個くらい足したような感じだった。そこで本当に沢口の事を伝えて良いのだろうか？　と思った。お節介じゃないか？　と思った。

俺は考えている途中で目的地についてしまった。
だが着いたのは良いのだが、九十九里に住んでいると沢口は言っていたが、そこの何処かは分からなかった。
だから近くの漁港で聞き込みもした。それに2日ほど聞き込みをした、そしてようやく沢口の家族と出会う事が出来た。

沢口の父親はフィリピン戦線に行っていて、まだ帰ってこないと聞かされた。
沢口の母親と沢口より2つ下の妹さんは沢口の話を黙って聞いてくれた。
そしてアイツが虎頭で過ごしたことを、アイツが想いを寄せていた人が居たことを、俺は話した、でも、さすがに相手が砲魂だとは言わなかった。2人とも、何も言わずに、本当に聞いているだけだった。

そして怖くなった。何かを言ってくれれば、何かを怒鳴ってくれたら、何を考えているのか分かるのに、心の底で何を思っているのか分からなくて、怖かった。

全てを話し終えたとき、「ありがとう」と沢口の母親は言ってくれた。妹さんは「浜まで行って来る」と出て行ってしまった。
俺はしばらく、沢口の母親と向き合っていた。沢口の母親の頭には白髪がチラホラと見受ける事が出来た。
「……そうだ、ご飯にしましょうか？」
泣きながら沢口の母親は言ってくれた。遠慮したが、どうしてもと言われ、ご馳走になることになった。準備している間に浜に行った妹さんを探してきて欲しいと頼まれた。

雲が低く垂れ込め、海も空も白と灰色に染まっている。浜辺の砂は皆黒い。そこに白いブラウスにモンペを履いた少女が1人だけ立

っていた。
周りには消える事の無い海と風の音だけ。
この世界に俺と妹さんしか居ないような錯覚を覚えてしまう。
「あの……」
「兄が……兄が恋したその人は……」
「満州で、亡くなりました。相沢も、ヨヒトちゃんも、沢口も……みんな、死んでしまって、俺だけが……俺だけが、生き残って……しまい……ました……」
言っている途中から、視界がボヤケ、俺の頬を液体が走って行った。
喋ってから言い過ぎたと思った。だが言ってしまった。
みんな死んでしまった。みんな俺を置いて逝ってしまった。俺は『試製４１糎榴弾砲』が鎮座したドームでも、他の砲座でも、シベリアでも死ねなかった。
俺１人だけが、生き残ってしまった。
「……もう、良いんです……」
白いブラウスと声を細かく震わした言葉が波と風の音が耳に入る。
「もう、戦争は……終わったんです。もう、死ななくて、良いん……です」
妹さんは瞳を大きく開いて、涙を流して、ハッキリと言ってくれた。
「生きて下さい、お願いです、生きて下さい！」
初めてだった。今まで『死に底無い』と言われた俺が、『生きて』良いと言われた。
「生きて、下さい！！」
「……はい！！」

雲が低く垂れ込め、海も空も白と灰色に染まっている。浜辺の砂は皆黒い。そこに白いブラウスにモンペを履いた少女と少年が２人だけ立っていた。

周りには消える事の無い海と風の音と、２人の泣き声だけ。

沢口の家に２人で帰ったとき、目を腫らした俺たちに何も聞かずに沢口の母親はご飯を出してくれた。白いご飯が茶碗に入っていた。味は、戦地に行く前に食った飯と同じ味だった。

それから俺は沢口の母親に家族は？　と聞かれた。その時家族の顔が頭を過ぎた。何処で、どの様に死んだのか分からない家族を思い出した。

家族は広島に疎開していて、戦争が終わったのに、家に誰一人帰って来ていないことを伝えた。

それから沢口の母親に行くところはあるかと聞かれた。俺は素直に無いと答えた。俺を満州に送り出してくれた家族はもう、居ない。空襲でボロボロのあの場所に、もう俺の家は無いと言って良かった。

それを聞いた沢口の母親はしばらく何かを考えていたが、「男手が足りないから、しばらく、ここに住まない？」と言ってくれた。だがそれも遠慮はした。素性も知れない俺を置くなんて……。でも沢口から送られた手紙によく『同期の風間』とアイツは書いていたらしく、俺の事をよく知っていた。

それからは殆ど運だった。

沢口の家を訪れた１９４８年の暮れに、俺は沢口家に婿入りした。結婚してから２年後、娘が生まれた。ちょうど朝鮮戦争が勃発した年だった。

最初は破竹の進撃を続けた北朝鮮は、あの時の日本のようだった。国連軍との戦闘は熾烈を極めたらしい。日本はその後ろに隠れ、朝鮮特需と言う神風で荒廃した景気が上りだした。

その２年後、息子が生まれた。

それから２３年後、娘が結婚した。１９７４年だった。
虎頭に居たときには思ったことも無い、娘の結婚だった。嬉しかったが、だが俺だけ、この幸せを享受していいのかと心に闇が差した。
だが、あの時、九十九里で泣いたあの時の言葉が鮮明に蘇った。
妻となった沢口の妹さんと娘の結婚を祝った。それは虎林に居たときのように嬉しくて、楽しかった。だがその３年後に孫が生まれたときの喜びはそれいじょうだった。

しかし喜んでいられるのもつかの間だった。５０代の後半に入ってから体が言う事を利かなく鳴り出した。

７０歳の誕生日を迎える時にはもう１人で遠くに旅行に行く事がとても困難になっていた。だからもう旅行に出るのは最後だと思った。
だから家族に無理を言って、虎頭に旅行に行きたいと言った。家族は反対し無かった。
一緒に暮らしている娘夫婦とその孫と４人でツアーに参加する事になったが、夫の方に急用が出来たため、孫の友人を誘おうと話になったのだ。

「……さん、とうさん……」
体が揺すられ、重い目を開ける。
「もうすぐ到着ですって」
女性が声をかけてくる。それに俺は「あぁ」と返す。
「あの、おじさん？」

×××××ちゃんが好奇心を湛えた瞳で何か質問しようとしていた。
「どうしたんだい？」
その瞳には覚えがあった。
「その『虎頭要塞』には何で行くんです？」
「……友人に会いに行くんだよ、太平洋戦争が終結したにも関わらず、降伏してから3日間戦い続けた友人にね」

「それではしばらくの自由時間とします……」
巨大なコンクリートの固まり背にバスガイドが注意事項を言っている。それが終わると気の向くままに歩き出す旅行客。中には手にカメラを手にした人も居る。
孫と××××ちゃんは2人で走り出していた。

俺は女性――娘と共にその塊に歩み寄る。
「沢口、帰ったよ……」
誰に言うでもなく言った言葉。虎林で買ってきた包子（パオズ）の袋を女性から渡してもらう。
「ヨヒトちゃん、沢口にも食わせてやりなよ」
そっと袋をコンクリートの冷たい床に置く。崩壊した鉄筋コンクリートドームは『精製４１糎榴弾砲』があった場所には大きな円形の水溜りが広がっていた。壁には直径４１０ミリの砲弾が１つ立てかけたる。

「やっぱり、俺は死に底無いなんだな……」
俺もあの時死んでいれば……。みんなが戦い、みんなが死んだ場所。俺はこの４７年間を生きてきた。
特にコレと言ったものを残さずに俺は生きてきた。それはとても沢口たちに申し訳が立たないようだった。
やはり俺は、死に底無いなんだ。

「遅れを取るな！　沢口！」
「おい！　待てよ！」
「沢口！？　ヨヒトちゃん！？」
ソ連が８日の夜に行なった砲撃のように唐突に響いた声。
風間は床に置いた袋を掴むと痛む体に無理を言わせてドーム外に出る。
そこには長い髪を風になびかせる少女と少年が居た。その姿が大日本陸軍の士官服を着た２人となる。あぁ、アノ瞳は、ヨヒトちゃんに似ていたんだ。
「お前ら……なんでそんなに元気なんだ？」
そう言って俺も追いかけようとした。だが振り向いたヨヒトちゃんの日本刀のような瞳が俺を向く。彼女の口からは『まだ来るな』と言っていた。続いて振り返った沢口は『お前が来るのは早いよ』と言った。
そして『『お前は大切なものを残したよ』』と２人が言った。

そして２人は消えた。だがそこには少年と少女の楽しげな背中があった。
あぁそうか、俺は、新しい命を残したんだ。この国の、いや、沢口やヨヒトが笑っていた虎林のような、あの世界を作っていく、命を、残したんだ。
「そうなのか？　沢口、ヨヒトちゃん」
それに答えるように、青い空に優しい風と声が流れた。

エピローグ（後書き）

作者「ここまで読んで下さり、ありがとうございました」

ヨヒト「まぁ改定前はシメが台無しだったな、今回は……」

作者「前回は反省しています、伊藤先生が仰ってくれたように『はっ？』って終わりでしたから」

大和「それはこっちもです！！　何ですかアレ？」

作者「シメって苦手で……」

大和「ジー」

作者「ま、まぁ、取り合えず終了しました、これからは『艦隊決戦物語』の改定作業に取り掛かります」

ヨヒト「他にはなんかやらんのか？」

作者「いや、そもそも1つの小説で手一杯なので、それを今回で痛感しました」

大和「文章力が無いんですね」

作者「その分濃密な文章が……」

ヨヒト「書けないだろ」

作者「書けません……」

ズズーン！！

大和「あっさりと認めないで下さい！！」

ヨヒト「今までこんな作者に付き合ってくれて本当に感謝だ、小説は終わるが意見と感想を待っている、それじゃ、サヨナラだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0882h/

砲魂決戦物語～俺と榴弾砲が満州で～

2010年10月8日15時49分発行